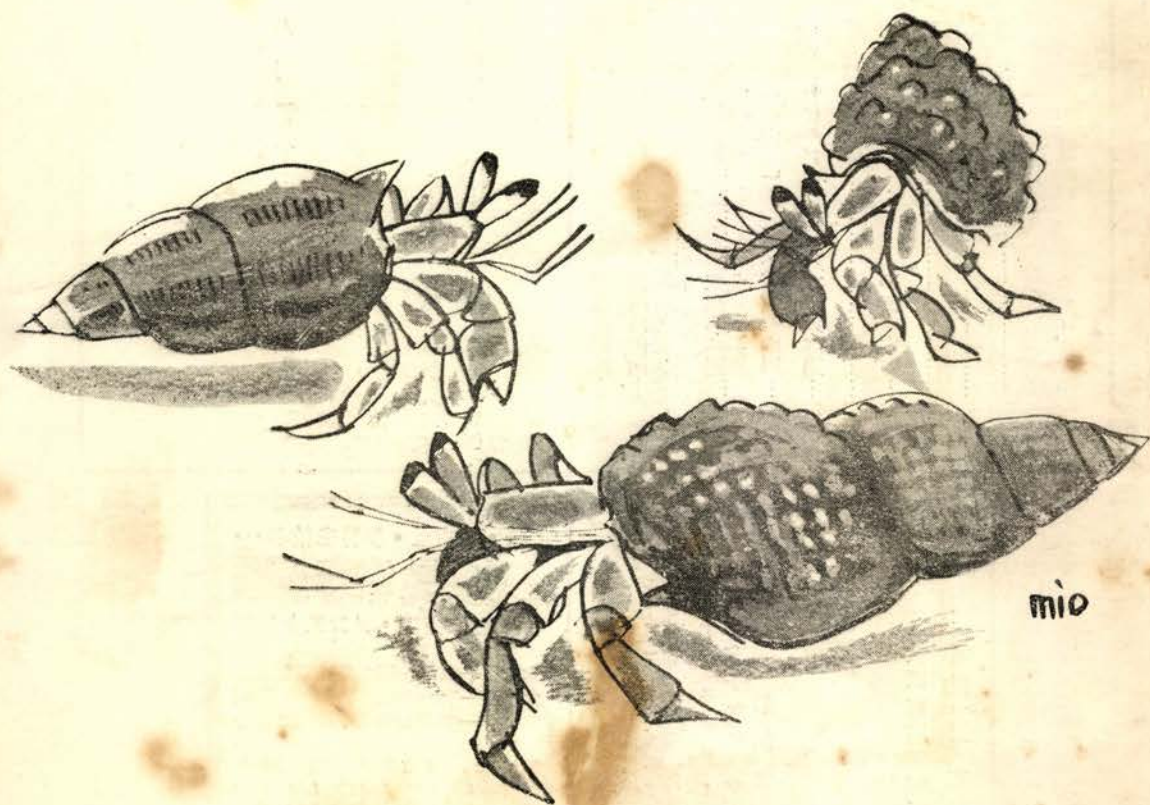


川柳の雅証

麻生路郎★主宰
山雨樓追悼號



Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi No.340



九月號目次

(昭和三十年)

題 字……………麻生 路郎
表 紙……………米田三男之介

山 雨 樓 逝 く……………麻生 路郎(三)
悼 山 雨 樓

中島生々庵……………市場没食子(八)

大久保大夢子……………大西 八歩(一〇)

須崎豆秋……………長野 文庫(一〇)

川村好郎……………正本 水客(一〇)

北川春巢……………小西 無鬼(一一)

富士野鞍馬……………三鴨 美笑(一二)

浜田久米雄……………服部十九平(一二)

水谷竹莊……………安川久留美(一二)

大石文久……………直原七面山(一三)

政田大介……………久保和友(一四)

出口白猫児……………追 悼 吟(一四)

雄川柳まつり……………戸田古方記(一四)

梶尾節子さん……………丸尾 潮花(一五)

を訪ねて……………丸尾 潮花(一五)

川柳と愛情……………政田 大介(一五)

人間横丁……………東野 大八(一七)
名は休を表わさず……………長野 文庫(一六)

江戸川柳に現われ
た女形役者の紋……………阿達 義雄(一八)

帽子談義……………大西 八歩(一七)

前進すること……………日置 文郷(一三)

★

不朽洞句帖……………麻生 路郎(二)

川 柳 塔……………麻生路郎選(四)

同舟近詠……………諸 家(七)

近作柳 樽……………麻生路郎選(六)

一路集……………北川春巢選(六)

「犬」……………大鶴喜由選(五)

「ビルディング」八木摩太郎選(一五)

各地 柳 壇……………戸田 古方(一三)

川柳第二教室……………戸田 古方(一三)

不朽洞会から……………戸田 古方(一三)

柳 界 展 望……………戸田 古方(一三)

公私 雑 記……………戸田 古方(一三)

大 阪・名古屋・伊勢を結ぶ…

近鉄特急

座席指定・ノンストップ

大 阪—名古屋 2時間55分
大 阪—宇治山田 2 時 間
名古屋—宇治山田 1時間42分

大阪上六発	名古屋発	宇治山田発
7.40	15.40	8.00 16.00
8.40	17.40	9.00 18.00
11.40	19.40	12.00 20.00
13.40	14.00	12.50 20.50
		14.50



本社 大阪市天王寺区上本町6

近畿日本鉄道



藤 村

ソフトアイスクリームコーン
アイスクリーム各種容器
洋菓子サンドウィッチケーキ
食品用紙容器紙製品

大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
電話 天下茶屋 三三〇九番



山雨楼逝く

▼多年闘病生活を続けていられた山雨楼・福田義達氏が六月十六日午前六時四十分、横浜市保土ヶ谷区岩崎町十番地の自宅で永眠されたことは寔に痛惜に堪えない。行年五十七歳
▼氏は明治三十一年十月一日生。出身地は岡山市牟佐百三十九番地である。大阪時代の山雨楼氏は頑健そのもののような体軀の持主であつたが、その一生を鉄道人として人一倍刻苦勵されてゐたため遂に病を得て退職。晩年国会図書館に職を奉じられたが、これ又宿痼のため退職のやむなきにいたり、自宅にあつてひたすら療養につとめていられたが遂に

起たなかつた。

▼氏は資性剛健質実であり責任感が非常に強かつた。事にあたつては細心でもあつた。三十余年の川柳生活に於てすぐれた作家であると共に研究家としても評論家としても知られた所以であらう。氏の計が柳界にとつても我が社にとつてもマイナスであると同時に大きな損失であることは贅言を要しないであらう。

▼氏が川柳に手を染められたのは大正十四年一月頃であり、その柳歴と識見とにより路郎門の高足として昭和二十九年二月一日川柳雜誌社副主幹に推されて今日に及んだことは周知の通りである。川柳以外の趣味としては俳句、謡曲、庭球、囲碁、文芸等全く多趣味の人であつた。氏が如何に川柳を愛好していたかを知るために清美夫人からの書簡の一部を採録して見よう。

「……僕は川柳のために生き抜くのだとがんばつて居りました死ぬまで書き続けるのだと口ぐせの様に言つて居りましたそれで永年書き綴つたのであります枕辺の物は大事にする様と言つて居りましたので別に保管してあります……」

▼氏の枕辺にあつたすべてのノートや切り抜帖は夫人の手で完全に保管され、小包二個となつて既に我が社に送り届けられてゐる。何れ適当な方法で発表したいと思ふ。

▼五月二十七日付の鉛筆書きのハガキ（七月

号飛燕往来参照）は死期の迫つたことの子報であり、七月号に発表の句はすべて辞世の句であつた。私たちはそれ等の句を一読してただ暗然とした。

▼氏は死期が迫つてもなお宗教にすがらうとはしなかつた。川柳による安楽死を希望し、何負けてたまるか目にも見えぬ菌と、最後まで菌と闘ひ続けられたが遂に菌のために敗れたのであつた。しかし、川柳に生き抜くことの悲願が達成されたことは氏のためにせめてもの欣びとしなければなるまい。願せよ山雨楼。合掌。

不朽洞句帖

麻生路郎

山雨楼の遺稿（五句）

片腕を千切られた思ひして焼香す

川柳^{はと}伏蒼白き月に入りしか

オ、山雨楼と呼ばば一ト筋のけむり

しかし奥さんという声をもう聞けず

絶筆も一糸乱れぬ君なりし

生々庵の酒供養に招かれて（二句）

孫がもういけませんという酒供養

酒供養はとけも席に出て来そう

持家の夢はさうめかろう

人の心はさうめかろう

三つ子の夢はさうめかろう



兵庫県 戸倉 普天

気になる事のあるらし社長早出なり

老夫婦宿の給仕も放つとかれ

借りて出たカメラは花に置き忘れ

恩師もう眼鏡額にあげ給い

豊中市 戸田 古方

ハネムーンのプラン弟に訊かれ

窓へ来て猫も見ている朝の靄

大阪市 市場 没食子

世が世なら佐官なりけり守衛長

能率はもう自転車にあらす

すく／＼と間引そこねた子が育ち

ガム噛んで大和撫子見下げられ

城崎橋立にて二句

夜明して城崎節を教えられ

股のぞき撮ってるところをまた撮られ

トルコセンター

タクシーで横づけにしてトルコ風呂

ホノルル市 内藤 草一郎

紅棒がちっとも減らぬ母代り

立志談時代を意識せず話し

同窓会女優がいつち羨まれ

家風かと養子独酌して思ひ

前身を云わす子無なきを淋しがり

米子市 三鴨 美笑

松江水郷祭

三味のなる舟がボートをかき分けて

緑之助兄と語りて

更けること知らず二人に花火消え

東京都 前山 北海

進学に頭使わぬ親の吐

職がなく婿にやる口決めちまい

東京ヘシヨートケーキを食う家出

子の齡をいまいち妻に聞いて書き

大阪市 正本 水客

山雨楼さんに

宗教が信じられないままてよし

下駄の裏見せて寝ている涼台

年寄のそこへ進んで嫁くと云う

うちの子もやるなと思う参観日

大阪市 丸尾 潮花

恋もなくろうけつ染めの手を洗い

奈良奥山観光

奈良の街積木細工のように建ち

大阪市 北川 春果

どこか行けへんのと日曜日煙がられ

自家用で出社するのに被るバナマ

ヘッパバーンにして看護婦に夢があり

岡山駅頭の桃娘

岡山県 浜田 久米雄

桃娘こゝは備前の匂がし

かけ引のうまさ自宅ではくそ笑み

どうかなるつもりは月賦払いにし

手紙では書いて面前では云わす

外泊へ根掘り葉掘りのめしをつぎ

大阪市 武部 香林

飛び乗りのように結婚してしまひ

内職の分も嫁く娘の帯になり

背を向けて女は何を悲しむや

占領政策漸くダンス下火なり

瘦我慢三次会までついてゆき

大阪市 木下 幽王

その実は妻も泳いでみたいなり

はったい粉今もの言うたらあかんがな

たべながら次のおかずを考えてるママ

出雲市 尼 緑之助

涼を追うつもり大橋埋めつくし

松江水郷祭所見

療養所薬の匂う草の風

灰皿の灰は山なし共稼ぎ

み／＼ちい事も並べて金詰り

兵庫縣 小西 無鬼

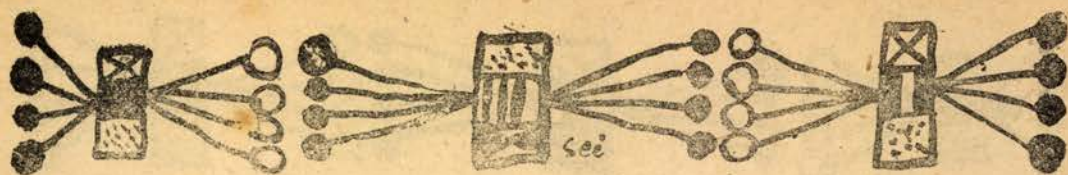
未だ睡気醒めないらしい電話口

借金を断るうち忙がしく

新町長

当選へ早や町長の声になり

町議選



たかが町議へやれ終盤のマイクのと
大臣の夢が課長に未だ成れず

吹田市 野本 呑水

妻の母田舎にて卒中で急死

順でよし湯棺へ無駄な口もきけ

尼崎市 小林 文月

夫唱婦和明治の歌がまた聞え

大阪市 亀山 晴峯

旅行雑詠

汽車弁が五日続いて味気なし

博多駅牛の啼いてる貨車もあり

大阪市 富岡 淡舟

ボート漕ぐ海が見られる療養所

海の怒りに科学も歯がたたず

人間の価値は相手が決めてくれ

誤りは誰にもあるさという上司

奈良県 飯降 白香

梅雨のようにヒステリーがまだつづき

山口県 長野 井蛙

小遣儲けと云う職で下駄をはき

ニコソンのグレン見上げる淋しい日

岡山県 直原 七面山

逢曳のブラン控いたチチキトク

純潔を誇りにしたは昨日まで

石の様に生きたを悔む女教師の

金貸した様に税務署取りに来る

叩き売りのように長女は嫁がされ

大阪市 西森 花村

眺望を賞めたい山の名は知らず
老らくの逢曳童心にも帰る

鳥取市 河村 日満

福田山雨樓氏の計に

承らえて益なき生命替わらむに

希いただ楽に死ねたかなど思い

五十には五十のパーマ地味にかけ

風流の名だけが売られて金が出る

交際費もう叱られる頃と知る

声出して出来る欠伸も我が家なり

岡山県 福島 鉄児

近い内に来るとお金もない癖に

墓迄も造り寿命を待つており

大阪市 西 いわを

さゝやかな散財女ビール抜く

教授会議論に暮るゝ日が続き

岡山市 服部 十九平

禰宜の子がおさがりものゝ鯛に飽き

簡単に金で幸福得られる気

先妻の内助の功がいま分り

岡山市 大森 娘句楽

豪勢に呑んだをボリスちゃんと呼び

復縁の話争んだ嫁を連れ

達筆につい人間を買いにかぶり

尼崎市 長谷川 三司

大胡坐臍まで出した冷やっこ

孫出生

宮参り封建性も笑われず

中元の品をお金に変える所
病名をはっきり言えぬ恩師なり

高知市 大西 迷窓

ストリップ見てる雑草のような人

良いところも知ろうとしない倦怠期

信頼に足りず意見もしてやらず

下関市 石川 侃流洞

プラスアルファ一だけ内緒にしたジョッキ

優勝へ馬も嬉しい息を吐き

大阪市 安岡 珊枝郎

いやゝしとあの子ねっからあきまへん

広島県 山田 季賛

飲んだ額まともに言えば妻あきれ

良心をごまかす口笛吹きました

仲居して客の生活を批判せず

嬉しさに皮肉を軽く聞き流し

倉敷市 木村 千容

妻はよし掌のくぼほどの土に生き

バラいじりしていなさいとも云えす

激論の後のサービス気味悪し

倉敷市 田垣 方大

無理心中する程好かれても困り

向日葵のような女の愛情か

燕でかした押へ糞をかけ

石川県 那谷 光郎

形式に調べて税吏の友は去に

形式に調べて税吏の友は去に

形式に調べて税吏の友は去に

聴収者のことと云うべし



看病の父は氷囊替えるだけ

暑中見舞今年も先手打たれたり

大阪市 木村 水堂

良い人であった証拠の通夜の弁

血圧を気にしていない大ジョッキ

堺市 八木 摩天郎

恋人は風邪薬まで購うて逢い

七福神八等身に笑ひ合い

倉敷市 水谷 谷水

職長ともあろうに市場籠さげて

貧相なほうが社長と教えられ

アベツクばかりだったと白浜から帰り

妻は子は親はないのか執達吏

重役会議今度はどの景勝地

倉敷市 相原 一善

世は様々あすこは女が食わせてる

男の子とう／＼裸で放つとかれ

岡山県 田村 藤波

ほん／＼で育って汗の味知らず

怒らない父より怒る母を好き

岡山県 岡田 夜潮

ゆっくりとしていてくれ尻からげ

猫ばかりいじって客を取り合わす

岡山県 政田 大介

百姓をする気になった嫁き遅れ

岡山県 臼井 三林坊

べんちゃらでようやく係長になり

大阪市 稲葉 鳩花

首切った社員と出合う立呑屋

倦怠期向う三軒さからわす

行水へ風情を誘う葉が落ちて

茨木市 下山 清潮

この先を食うに白髪が眠られず

社長まで頼りにされる有難さ

岡山県 本田 恵二期

二週間別れる妻へ手など振り

さびしさは女らしさを故意に捨て

歯医者いまおのれの虫歯もて余し

大阪市 真鍋 一瓢

淀川の幅を信じて死に行く

猫の死

甘たれた声も昨日を境にし

やる方もくだらんものと知って鬨斗

あの腰へ桔梗の花の浴衣着て

青筋を立て、魚屋売らず去に

売春法婦議は柳眉を立てたま

夏手袋女の気持や分らない

死水を取らさにやらぬ叱りよう

京都市 松川 杜的

鐘の音に感傷もなく母の老い

葱坊主無口の子供にへし折られ

乗継ぎの時間闇屋に教えられ

大阪市 永田 六龍子

大掃除細かいとこは妻の役

歳かいな唄一帖持ちあぐみ

鳥取市 森本 法泉水

叱られに行くに蝶タイまで結び

行軍で歩いた道をバスに乗り

大阪市 佐野 白水

御亭主に似た子がみんな出来悪く

倉敷市 松村 万古

迷信じゃないと頑固が捨て切れず

豚尻ですそれなら豚の親かいな

就職のその日からもう借り歩き

成績は落ち近眼の度が進み

倉敷市 藤井 春日

囁目をされて二号の私下

掌の甲でオホホホホともう十九

サイン帖素直さ欠けた字が並び

入道雲ビールを飲めと言う如く

大阪市 木口 賀峰

性格の通りの莽だとけなされる

よう来たと母は手すから蚊帳を吊り

良い友があつてどうにか持ちこたえ

岡山県 津田 麦太楼

お若いと言われその気に一寸なり

三面鏡女体の神祕余すなし

運根鈍ここまで墮ちた裏長屋

養老院瓜や茄子の花盛り

母子寮の横も裏手も無縁墓

お家柄箱提灯の抱若荷

すば抜けて墓の巨きな成り上り

米子市 小西 雄々

家出する決意をせまる汽笛鳴る



學歷が女子大だから養子来ず
地図かいて呉れたが会社見当らず
子沢山誰かの鼻緒切れている

堺市 高崎雄声

貸浴衣胡坐になって名所聞く
神戸市 岩田一夜

同舟近詠

金沢市 安川久留美

病院が増築したを苦笑い
押ピンが一つなくとも事が欠け
待ちあぐむ所へ二台続いて来

大阪市 森文夫

本妻へまだ産ます氣の旦那
一坪の店で胃袋満たしとき
大阪府 清水望峰

金持の子ばかりかついで居る屋台
大阪府 木村十悟

山の湯のこんな宿にもあるテレビ
裏切った女が先に出世をし

大阪市 吾郷玲人

お隣りの断り上手真似られず
大阪府 伊達堰子

交叉点渡る姿に似た暮し

大阪府 不二田一三夫

住宅の会社へアパートから勤め

よいほうの声と言葉で挨拶し
鯛の上にとまっていたても鯛は鯛
丸太ン棒と縄でサーカス小屋が出来
創造の神に逆らう情事して
兵庫縣 酒井ひか平

寝る時間だけが倅せそうな人

思い出は蜜柑の花の唄にさえ
国技館で花角力を観る
長男年昭の新盆を迎えて
一斉にカメラを向ける土俵入
プロレスの見ている方が気が疲れ
長野縣 高峰柳児

蚊帳へ呼ぶ按摩怪談めいてくる

可哀想に蟬へ一寸程足らず
關病の蜘蛛の根氣に教えられ
✓メーキヤップ程は得意でない料理
✓人生の黄昏れ浅鯛を取って生き
丁度寝かけたところへ長尻やってくる
祭寄附ビールの夕餉見つけられ
没落と共にぱっくり亡くなられ
看護婦の笑い声にも腹が立ち
大阪府 深見雅堂

洗濯機妻を映画へ行かすヒマ

集金の若き陽焼けをいたわれ
土曜日を役得早々姿消し
病人の機嫌蠅叩きを構え
貧しさへ涙もろさがあるばかり
今治市 長野文庫

嫁き遅れ三十一文字ですわており

小あきんど妻へ怒りを持ってゆき
映画では生やさしそう東京都
今に見る同人雑誌吼え続け
入選のコントが仕事嫌いにし
心中を秀才にする記者の慈悲

起きて見りや金魚やっぱり泳いでる

大阪府 深見雅堂

ホルモン剤人知れずこそ飲んでおり

大阪府 深見雅堂

未亡人同志で性のことに触れ

大阪府 深見雅堂

新妻のまだ恋人の気が抜けず

大阪府 深見雅堂

百姓もいいねと街からたまに来て

大阪府 深見雅堂

特価品だったと妻へ言わす出し

大阪府 深見雅堂

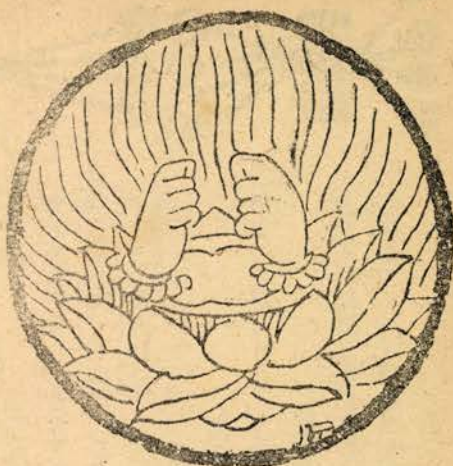
丁寧に書いてはいるが誤字多し

大阪府 深見雅堂

倉敷市 野田素身郎

大阪府 深見雅堂

子ちゃんも口をさしてさあ



悼

山雨樓

山雨樓さんに
詫びる

中島生々庵

山雨樓さんが逝去せられた通知を編集局から受けた時、私はどうしても一筆書きたい、書かねばならぬ、そしてお詫びをせねばならぬと云う気持ちで一杯になった。然し考えて見ると山雨樓さんにはとう／＼面識もなく山雨樓さんを語ると云う様な資格は私にはない様な気がする。正直なところ山雨樓さんが亡くなられたと聞いた時心の中で我を忘れて仕舞ったと叫んだ。取り返しのつかぬ事になった人の死の儼然の前に、悲しみと云うよりも後の衝動が先に立つの

をどうする事も出来なかったのである。

柳縁だけでなくその外に何か目に見えぬえにしの糸に結ばれて居る気がしてならなかった折柄だったので、一層山雨樓さんの死が私の心を強く揺りゆすぶって止まな

昭和三十八年十二月不朽洞会常任理事会ではかねて路郎先生より提唱になって居た副主幹問題を正式に取り上げて、山雨樓さんに就任して頂く事を決定した。そして一応内諾を得るために親しく枕頭に参向してお願ひする使者を立てる事になり、不肖生々庵が路郎先生の親書を携えて新春刻々この大任を果すべくお引き受けする事になった。

出発前予め東京の藤本満年氏と打合せ、満年氏の自家用車を横浜駅迄廻して頂き氏自身も御同道下さると云う手筈を確定して昨年一月二十二日夜大阪を立った。山雨樓さんの好物と承って居た肉の味噌漬けを播重に造らした外に荷物とてないところから少々重いがリバーのタイプレコーダーを汽車に持ち込んだ。初対面の挨拶やら御見舞やらさては肝心なお使の条々路郎先生の御親書呈上等々の様子をタイプにおさめて……という

いふそれこそ走馬燈の様に頭に描きながら私の夜汽車はまっしぐらに東へ東へと夢路にだけ込んで行つた。ところが翌朝目を醒まして見ると全く予想しなかった出来事が私を待つて居た。それは前夜か

ら東京一円を襲った近年稀有な大降雪である。先行列車に従って私の列車も遅延々々で走つて居たのがとう／＼大船の手前の小駅で停車したまま見込みもたぬお先きまっくらと報らされた。九州生れの私は勿論初めて見る大雪、乗客の中には寝台車から思い掛けぬ雪が見が出来ると喜んでる向きもあつたが私は満年氏が横浜駅で大雪の中を数時間お待ち下さつて居る事やら横浜から保土谷の山雨樓さんのお宅迄の交通状態がとて目ざらう事やら次々に不安が増し重

き電話で満年氏と連絡をつけ路郎先生の御親書並にお見舞の肉の味噌漬にお詫びの手紙を添えて郵送、その夜の急行で魂の抜けた足どりの儘大阪に帰りついた。几帳面な山雨樓さんからはもう早速お便りが参り、楽しみにして居た事がっかりした事、然しお役目の用件に就いては快諾する事、そしておん身に障りはなかりしやと親情溢るゝこま／＼のお筆の終りには是非近い内にお目にかゝる機会を楽しみに待つて居る事を繰返し繰返し書かれていた。

一年半と云う時間がたつて居るのにどうしてお目にかゝる折を見出せなかっただらうか。とり返しつかぬ後悔が何時までも何時までも私の頭に残ることだらう。お詫びの心で一杯である。合掌。

句集に寄せる
熱情

市場没食子

一昨年の春、学会で上京した際、御無沙汰を詫言つていた山雨樓さんを御見舞した。丁度午前の安静時間を終えられたところで布団の上に上半身を起され、臍の上に今朝着いたばかりだと云う「川柳雑誌」を乗せられて大変喜んで僕を迎えて下さった。二、三話の末慈々吾々待望久しかった路郎先生の句集が出る運びになりましたと

告げると、今一寸雑誌で拝見したのですが、不朽洞会のA地区殊に在阪の方々に色々御苦勞をかけて誠に申訳なく思っている。自分は路郎先生の句集が世の中に出る迄死んで死に切れな、と冒頭して、自分は自分の信念として路郎先生の句集は当然新聞社や大書房から出版されるべきで、それが文化人として社会的にあれだけの貢献をされた人に対する憐れみであり礼儀であると思う。それに何んぞや採算が取れぬとの理由だけでその学に出ないのは実に怪しからぬことである。斯うして寝ていても私の頭には始終この事で往來している。此の間からもさる大書房に路郎先生の句集刊行を交渉しているが、やはり採算の事で僕の意に反する回答が来たと情けなさそうなる顔で憤慨して居られた。聞いて居る僕は目頭が熱くなつたし、師を思われる情熱に強く打たれた。闘病生活既に久しく且つ重症の様に僕の目に映った氏が作句に執筆にその努力には頭が下つてならない。

山雨楼さんと僕や喜由氏は川柳生活に於て同じようなコースを辿って路郎門下に入っただけに尊敬して止まない先輩であった。昭和三、四年頃漢町保線事務室に勤務せられていた頃には同所の句会にも二、三回寄せて頂いたことも想い出の一つである。山雨楼さん今

やなし。險を閉すれば健康なりし日鉄道職員制服制帽で句会に来られたお姿と病中御見舞した時の姿が交互に目に浮ぶ。嗚呼、台夢。

山雨楼の真剣さ

大久保大夢子

凡そ職務といわず、川柳といわず、私は山雨楼程真剣な人はまだ知らない。彼が岡山県の商業学校を出て鉄道の小役人となつたのは私より六年程遅れて——大正六年頃であつたと記憶する。最年少者としてアノ係コノ主任から写しものや書類綴を仰せつかつて殆んど雑務に追い廻されて居た。彼の所屬は庶務の人事であつたが私が最初に驚いたのは此の田舎者の少年がいつのまにか規程や令達をよく知つて居ることであつた。彼は写しものや書類綴をやりながら必要なものはチャンと頭にいれて居たのである。上司の眼が次第に彼に注がれる様になつた。私は次第に後輩の彼を尊敬するようになった。

彼は川柳にもこの真剣さを打込んでいた。大正も終りに近い頃であつた。彼の音頭で四、五人の川柳グループが出来たが、さてリダーが無くてはというので當時読売新聞に居た小須賀蘭香君を紹介して本田溪花坊さんの大大阪に連れて頂たく事になつた。「山雨楼」

名付の親は溪花坊さんである。初の句会の兼題は「梅田」であつたが「梅田駅降りて食ふこと考える」という彼の句が天位に選ばれた。私の川柳は極く短い年月であつた。

彼は驚くべき多量作家であつた。風飯後など彼がジツと道頓堀の方を眺めて居る時机上には句帳が置かれてあつた。彼は句帳に一定の行間をおいて几帳面な文字で書いていた。彼の行く処トランクあり、トランクの中には必ず句帳を忘れない。出張先の旅館でトランクの上に句帳を広げて推敲して居る姿を見るのであつた。



つた為彼の句について批評も出ないがこうした型の句が多かつたように思われる。彼の句についてはいずれ「川柳雑誌」のどこかに書いて下さることであつた。

の囑望を勝ち得たにちがひなかつた。話は少々わき道に入るが、私が川柳をやつて見ようと思つたのは山雨楼に「川柳雑誌」を見せて貰つてからのことである。私は当

今調の川柳はキラリであつた。「川柳雑誌」には詩としての句のある句があつた。路郎先生の「シャンデリア二階の端に椅子が見え」などは忘れ得ない。彼は私に投句の締切日を通告し句稿を督促した。私が「川柳雑誌」に毎号一句でも活字になつたのは彼の嚴重な督促によるものであつた。

彼は句作する一方、古川柳も研究した。川柳に関する図書文獻を読みあさつた。「川柳雑誌」へ入つて数年ならずしてモウ川柳人として立派な識見を持つて居た。昭和の初め転勤のため私は彼と顔を合わす日も少くなつたが依然として投句の督促はしてくれた。居催促とちがつてツイ電話だけの返事となつて私の川柳の影は次第に薄れていった。数年の後、彼は異常の榮進となつて本省に転じた。私と彼との交遊はこの時から杳として杜絶えてしまつた——二十余年——私の川柳は自然寂滅してしまつた。

ところが三、四年前、突然彼の年賀状が舞い込んでキモをつぶした。「戦後「川柳雑誌」も面目を一新したから投句をしてはどうか、自分は目下闘病生活をして居るが一年もすれば健康体に戻るであらう」と例の几帳面な文字で書いてあつた。私は彼の闘病生活にはさして驚かなかつたが再び「川柳雑誌」をひろげて彼は既に一流の川

柳家であるのに驚いた。というより私は彼の真剣さ——たゆまざる努力に対し深く頭を垂れたのであった。

今やその人は空し。君は私より天折した。しかし空気を吸って飯を食つただけで長生して居る私より川棚界に深い足跡を残して行つた君がどれだけ生甲斐のある人生を送つたことか。

私は君が終生この意け者を川柳の友だちとして面倒を見てくれたことを感謝して筆を擱く。

謹んで靈前に一句を捧げて合掌する。

初盆の友へお詫びを言うて
居る

山雨楼さんを
偲びて

大西八步

福田山雨楼さんの死に接して心の中を風が吹き抜ける思いがした。私が川柳に手を染めて七、八年後の倦怠期に、わざ／＼書面を寄せて激励して下さった有難きも、つい昨日のことの様な気がする。人生はこの様に早く過ぎ去り、そしてはかない。山雨楼さんが永い病床の身で川柳を捨てず、最後迄作句に研究に努力をつづけられた事は尊いと思う。戦前に松江で川柳松江支部主催の山陰川柳大会が開かれた折、山雨楼さんも

出席されて、同地へ商用で出張していた僕も同席させていただき、記念写真と一緒に撮った後柳蔭に花を咲かした想い出も、今は亡き

人への追慕となつてしまつた。同氏は又謡曲の趣味もあつた様に記憶しているが、聴かしていたゞく機会の無いまゝに大阪の土地を去られ、在阪十八年の僕も郷里の鳥取へ歸つてしまひ、交際と云つては年一度の年賀状丈になつてしまつた。

僕の数ある先輩の内、一昨年は鳥取で中島鉄洲さんを失ひ、今又山雨榛さんの永眠に会つた事は、自分の魂をけずり取られる程に淋しく思う。

途中下車しても会えない人
となり

梯子酒

須崎豆秋

私が未だ禿げていなかった頃にはよう呑み歩いたものですが、丁度その頃に、山雨楼さんが「川雑」誌上へ「豆秋論」というのを書かれ、その末尾のところで「……梯子酒を止めて今後の活躍を刮目して待とう」と一本頂戴しました。爾來改心してブツスリ（とまでは行きませんが）梯子酒をつくしみ川柳を勉強するようになりしました。今暮しき山雨楼さんの御恩を忘れてはならないと思っております。

積極的創作

長野文庫

今治市に川雑支部が設立されたのは昭和九年の九月であるが、設立に先だつて山雨楼先生に「川柳人の心掛けは如何にあるべき

か」このことに就て教えを乞うた
 処、打てば響く様に数日後「積極
 的創作昭和九年九月九日山雨楼」
 と半折に書いて送つて下さったの
 で、交部では早速これを表装して
 句会の度毎に会場に飾つて作句の
 精神として居たが惜しくも昭和二
 十年の空襲で灰燼に歸した。併し
 今後の川柳は山雨楼先生の心を心
 として作句して居り将来もこの精
 神で進み度いと考へて居る。

川雜東京支部の
恩人

川村好郎

「川難」東京支部を創立させて貰いたのが昭和二十四年四月である。六月の第三回會に山雨楼師はわざわざ横濱から出席して下さいました。風邪を引いていると仰言つてマスをして来られ句會が終るまでずつとマスをしつていられた。今にして思えば最早この時病魔に犯されていたのであらう。約二時間我々會員に懇切に御指導下さい、句會の在り方を衷に讃

虚な口振りで教えて下さった。私はまだ師のこの時の白いマスクが忘れられない。この日が山雨楼師にお目に掛つた最初であつてしかもこれが最後であつた事を思えば実に感慨無量で、其後一度も御見舞に行かなかつた事はまことに慚愧にたえない。

山崎櫓師はこの句会に出席さ
 ってからは毎月の句会ごとに必ず
 投句して下され選句をお願いすれ
 ば直に短評を付して且つ師の御秘
 蔵の古い雑誌、句集を景品として

御恵送下さった。会員等はそれを廻覧してどんなに喜び作句の上に力とし肉としたことか。

爾來川維東京支部の客員として絶えず激励して「川柳雜誌」へ必ず毎月投句せねば駄目だ」「このず頃顔を見せぬがもつと勉強せねばよい句は出来ぬ」と注意され頼られたことは二度や三度ではなかつた。

私が東京を去つて大阪に歸らねばならなくなつたのが動機ではあるが私の非力のため遂に師の御教導に何等報ゆることなく東京支部が絶ち消えになつた事は東京支部の大恩人の師に対してたゞたゞ深くお詫び申上げるより外に方法もない。

また東京支部の会員は残っている。誰か東京支部の再興をはかつて頂き山雨楼師の遺訓を継いで下されば必ずや師の靈も喜び給ひ御

山雨楼さん

正本水客

昭和八年の七月に大阪鉄道局クラブの句会へ出席して、熱心な指導に當つて居られた山雨楼さんにお目にかゝつたのが最初だつたと思う。近頃の課題で「眼鏡とればピーチバジャマの美しい」が一句抜けたのが懐しく思ひ出される。

その後、一年ばかりの間にどうやら人並の句が作れるようになり、「全快の走つてみせて叱られる」や「淡雪へ傘の匂いの新し



い」等大變はめて戴いたことは忘れられない。

十年の四月にプラットホームと

云う題で「プラットの遭難場所へ陽があたり」が天位に抜けたのに調子づいて、「……へ砂をまき」に初めしようと思つたんでんがと云うと、「そりゃいかん、そりゃいかん」といかにも汚ないものを見るように顔をしかめて云われたのを今でもはつきり思い出す。

それから間もなく本庁へ榮転されたので、この句会が最後になつて、西田卿榮さんがあとを引受けて下さった。

その後、東京へ出張の折など、寸暇を得てお訪ねすると、初めか

ら帰るまで句の話、路郎先生のこと、川柳のかたまりの様な人であつた。

特別の会の時などには、東京から夜行で来て又夜行で帰る無理をしてでも駆けつけて下さる情の人であつた。

二十七年の春に鉄道部内の者、二十人ほどとはかつて御見舞を差上げたことがあつた。その折の便りに「いつに変わらぬ御厚情をお寄せ下さい……小生の身体は永年の斗病ですつかり衰え、医師からは不治を宣告され再起の望みもなく、ひたすら、あきらめとさとの心境に入るべく昨夏以来、毎日病床で天井ばかり眺めておりまし

たが、この程アメリカで新薬が特效を奏しているニュースがあり、この薬が手に入るようになればと一縷の望みを託して安静休養にとめております……」書中アメリカの特効薬と書いて居られるのは今では広く使われているマイシンやバスのことであらうと今更涙なきを得ない。ひたすら川柳を愛することによつて、山雨楼さんの御冥福を祈りたい。

あ、山雨楼副主幹

北川 春 巢

山雨楼氏がまだ大阪湊町の鉄道運輸事務所に勤務しておられた

川柳の定義はのこる

富士野 鞍馬

「川柳の定義」——これは、誰でも欲しながら、それを言明するとなると、なかなかむずかしいのである。その難しい川柳の定義を、福田山雨楼さんは、立派に、論文として、発表された。その論文は、岸本水府さんの「川柳の書」に採用されてある。

この論文も、たしか、山雨楼さん病中の作と、記憶する。永い、病床生活の、その間に、克明な調査や、研究的文章を、いつも「川柳

雑誌」に発表されていた。それを説むたびに、俳句の正岡子規と、思いくらべて、敬服していたのであつた。

山雨楼さんと会つたのは、二、三回しかない。「昭和百人一句」をひらいてみると、山雨楼さんの、頭脳な姿が描かれ、

夕刊を売る子の声に辨がつき 踏切で抱けばわが子が猿に似て

頃、私も大阪の鉄道病院に奉職していた勘定になると思うのだが、畔柳社の句会へ私が出席しても、山雨楼氏はお顔を見せられず、従つて鉄道人同士としては、私は一度もお目にかゝつたことがない。

一度大阪の鉄道クラブで鉄道川柳会が催され、山雨楼氏が選者として臨席された折、私も出席したのを覚えて居るが、その頃まだ大阪に居られたものか、東京から西下されたものか、古い話でよく覚えていない。

その後戦争になり終戦を迎え、山雨楼氏は横浜に居られることを「川柳雑誌」上で見る位で、奥の所私に余り関心を持っていなかった。私の手の届かぬ高い所の人、と云つた感じであつた。二人の縁は浅かつたと云える。所が私が鉄道病院を辞めて、現在の交通局病院へ就職した時、昭和二十六年の事だが、山雨楼氏は、交通局の川柳誌「大阪」へ「祝春巢博士来任」と前書付きで

温谷を慕われそして川柳子 山雨楼

の祝吟を御寄稿下さつた。私は大いに感激し、現金な話だが同氏に對して近親感を覚えるようになった。私の行動が誰に、何所で見られてゐるかも知れぬ、と云う感慨と共に、大いに勉強せねばならぬと決心して、早速お札の手紙を書いたのだが、直接の御返事は頂

けなかつた。又その後、結核の特効薬ストマイ、パスなどに関して 死期のびる薬と聞いていた

りとする 山雨楼

と云うような句を発表されていたので、御病状のお悪いことは想像してゐたが、その後も不朽洞会常任理事会の満場一致で川柳雑誌社副主幹に就任され、重症の病人とも思ふ幾多の論文を発表されていた。私は前記の句も支那詩人の「白髮三千丈」式表現であつたのかと、心の中では稍々安心もして來ていた。所が去る六月十六日、何の前触れもなく遂に永眠されたのである。未亡人から路郎先生へのお手紙によれば、そのストマイも遂には「詩人」の希望通りの靈効を現わさなかつた由である。

ひとり「川柳雑誌」のみならず川柳界一般にとつても誠に惜しい人を失つたことは悲しみの極みと云わなければならぬ。私は心から山雨楼氏の御冥福をお祈りする。

山雨楼先生の

み霊に

小西 無 鬼

去る七月十日の本社川柳まつり席上で「福田山雨楼君が亡くなられた」と路郎先生より聞かされた時！全く晴天の霹靂でした。呆然として急に涙も出ませんでした。

我にかえって静かに先生の御冥福をお祈りする頭を垂れたのでありました。

山雨楼先生とは二十五、六年前、昭和四、五年頃私が今橋三丁目の会社で同人五、六名を得て関土地句会を始めた頃に御多忙中を夜間態々会社迄お越し下さって、本当に懇切な御指導をして下さいました。当時先生は湊町運輸事務所に御勤務だったと記憶しております。

暑い夏に詰襟の官服をキチンと着て姿勢を正して選評となれば一言一句をゆるがせにせられず誠に謹厳そのものの様な方でした。縁雨、琴人、ひろし、二南の方々と交代で関土地句会を御指導下さいました。当時の給料は国で羨む程でなし

山雨楼

の短冊が今私の宝として又唯一の記念品として夢の様に過ぎ去った二十五年前の山雨楼先生を懐に偲ぶのみとなりました。心から山雨楼先生の御冥福をお祈り致します。

合掌。

山雨楼副主幹を偲びて

三鴨 美笑

山雨楼主幹と会ったときは二昔半も前のことで、松江の出雲ビル三階で川維川柳大会の時であ

った。むろん路郎先生も来て居られた。私はまだ作句するのになじらした川柳幼年時代のことである。そのとき伯耆の美笑君はまだ若いなあ、川柳は何時までも捨てずにやりましようと思われた。鉄道の詰襟姿が今は殊更に想い出されて来ると共に川柳に多くの足跡を残されたことに心から感服することである。

山雨楼氏の思い出

浜田久米雄

昭和九年の秋のこと、醍醐寺の吟行に行った。句友は坊主持ちをして歩いてた。ふと見ると山雨楼氏が道端にとめてある牛車の牛の前に佇んでおられる。なかなか動かれそうにもない。牛の顔をじっと見つめておられた。われわれはそこを通り越して進んだ。

一年ほどたったある句会の題「土ぼこり」の氏の軸吟は「土ぼこり牛の目玉は涙ぐみ」とあった。絶えざる関心、細かい見つけどころの表われに私は頭の下る思いがしたのであった。

別の面から

服部十九平

山雨楼さんの柳界業績について語る人が沢山ある。私は別の面から福田義造氏の面

影を偲びたい。故陸軍中尉福田栄三郎君は山雨楼さんの愛児である。終戦の前の年十月ボーゲンビル島で散華された。山雨楼さんも遺族として年金や扶助料の手続をされた。本籍地が岡山県であるので私のところでそれ等を取扱った。そのため山雨楼さんからも再三照会の手紙を貰った。その手紙はいつも要点を簡潔に記述してポイントを逸せず事務的文書として模範的なものであった。

川柳忌・山雨楼追悼句会

初代柳翁を追慕し併せて先般亡くなれました副主幹・福田山雨楼氏の功績を偲び初秋の一夜を句作致します。

日時 九月三日午後六時半

会場 光明寺 大阪市天王寺区下寺町三丁目市バス停留所

(市電なら下寺町又は日本橋三電停下車)

兼題 「謡」麻生路郎選 「木魚」土井文蝶選

「駅長」正本水客選 「本場」富岡淡舟選

柳話 麻生路郎 北川春集

川柳雑誌社句会部

幹事 紫香・雅堂・いさむ
白水・凡九郎・雄声

遺族からは何千通となく依頼や苦情や陳情の手紙を受取ったが、山雨楼さんの手紙ほど要領よく書かれたものは未だ見たことがない。榮三郎君追悼のため出版された「偲び草」も送って戴いたが、これは単に親の愛情による記録というばかりでなく身分、死因、腹歴等恩給法上審査の根拠となるに十

分な立派な資料ともなった。川維に連載された川柳層を見る度に山雨楼さんが如何に丹念に克明に収集整理されているかに敬服していたのであるがそれは川柳についてのみならず家庭のことも常に几帳面に記録整理されていたことが頷かれほと／＼感服したのである。

福田山雨楼氏を偲ぶ

水谷竹莊

山雨楼氏に初めて、お目にかかったのは、東京赤坂の国会図書館

に勤めておられる頃であった。それまでによく鳥ヶ辻へも投句して貰い、色々句評も書いて貰った事もある。僕が図書館へ行ったら、入口で待っていて下さった。そして図書館の中を隅から隅まで案内して下さいました。そして色珍しい書籍も見せて貰い、古川柳に関する本も、沢山、見せて貰った。

赤坂の図書館は昔、皇太子殿下のお住まいになったとだけに、今は東京名所の一つになっている。それで沢山のお上りさんが観光バスに乗って次から／＼とやってくる。そして案内ガールの説明で、ぞろ／＼と並んで見学する事になっている。

その沢山の人の中を特別に抜けて一般の人が見学出来ぬとこまで見せて貰った時はとても嬉しかった。そして、一緒に食堂へ行って、食事を共にして、色々柳談に花を咲かせた。其後上京のたびに逢う約束をしたが、病い重くなり、図書館をやめられた。そして保土谷の宅へ一度お見舞にお伺いしたいと思っている内に、永眠の報に接して、悲しい限りである。

憶、風の如く

安川久留美

山雨楼君が他界した。機がなくな一度もお目にかからなんだが、誌

上根氣よく川柳のため書き続けた人で全柳壇の勇士である。

病氣の關係かも知れぬが、記憶も甚だ強く、正に本誌のための一つの宝玉であつた。五年前私がM病院生活時代に懇切な手紙をいただいたことがある。それが今では遺品となつた。

論筆の人山雨楼

大石 文久

警咳に接した昔を思えば、計較を手にして身を打つものがある。新我橋南詰の万よしで、益を手に氏と柳論に花を咲かせた昔が懐しく、既に二十数年の歳月を指折ることが出来る。

昭和の初め、溪花坊氏主宰の『大大阪』の随刊と同時に、川柳雑誌社同人となり作品を川柳塔に飾り、論稿を各社に寄稿し、本格的に川柳批判、作品の検討の道程を辿る。山雨楼川柳理念の展開の緒が『川柳雑誌』に於て実を結ばれ、三十年近く柳壇の潮流の中に指導の棒をさし、後輩に啓蒙を与えて来た川柳生活は、私の貧しい筆の表現では書き綴ることは出来ぬが、山雨楼論筆は、作句生活五年、十年生を基盤にして筆を執られていた趣きに感を深くするのである。

岩崎町を訪ねて

直原 七面山

昭和二十八年七月二十五日の午下り、私はうだる様な炎天を御いて、福田山雨楼先生を横浜の自宅にお見舞した。先生にお目に掛つたのはこれが最初でありそして最後でもあつたのである。なんの前触れもなく、突然訪れた私を前に、奥さんは暫し玄關に戸惑つておいでであつた。「どうぞく」のお声に導かれて、私は静かに山雨楼先生の病床に近付いた。「おお七面山君」「ああ先生」先生は起き上ろうと試みられたが、思い諦められて、「さつきまで、路郎先生に頼まれていた原稿を書いていたので……今ペンを捨てた許りなんだよ」と仰言りながら、川雑本社宛の部厚い封書を見せて下さるのであつた。「疲れているので寝たまままで失礼するよ」と言われながら、川柳談をボツリボツリと始められた。

最初一時間位の間先生は、自分がどれ程までに路郎先生を師として崇拝し、そして尊敬しているかについて、（それは正に狂信的とも云える程であつた）縷々述べられると共に、路郎先生が今日まで、日本川柳界の発展のために、一家の犠牲をなんら省みられることなく、如何に献身的な努力を払われ、血みどろの戦いを遂行されて来たかを、いとこまごまに、然も一々その事例をあげてお話しになるのであつた。病人とは思ふ程の力強さで吐露されるそれ等の言葉の数々は、正にその一語一語が、生きた川柳でありそして川柳雑誌社発展の歴史でもあつた。

話題を関東に向けられた先生はいとも悲痛げに、「僕の体が人並に健康であつたなら！東京の川柳界で一つ働きたいものだ」と病弱の身の切なさを感じ、と慨歎せられるのであつた。先生の川柳に対する情熱が決して並大抵のものでなく、如何に高く烈しく、強靱なものであるかに一驚するとともに、一語も聞き洩すまいと耳を傾けざるを得なかつた。

枕辺に座して二時間が、夢の様に消え去つて行つた。長い「貨物列車」が——本當に飽く程長い——先生の枕辺をゆきふつて、ガタゴト、窓の外を北から南へ、ものぐさそうに走つて行くのであつた。

果し得なかつた約束
政田 太介

昭和二十七年六月十七日山雨楼先生より次の様な手紙を戴いた。「——（前略）——次に突然で恐縮ではありますが、ふと思ひ出しましたのでお願いやら、おすすめを一つ申し上げます。それは詩人永瀬清子さん（明治三十九生、愛知高女出身）が志磐郡島田村松本に疎開？していられるので一度御す暇に御面会していただけないかと存じます。尤も小生は一面識もありませんが、志磐郡にいられる事が何となく懐かしくなりませんか。それに永瀬さんは川柳に對しても一見識をもつていられる事が、昭和十二年九月号の『蒼空』——剣花坊未亡人主宰——という柳誌で詩人新井徹氏の文章を通じてうかがわれます。しかし現在も尚島田村にいられるかどうかわかりません。一九五〇年の文学年鑑で見ただけであります。その点おたしかめの上若しお暇がありましたら御面会下さいますようお願い致します。『蒼空』のメモに永瀬さんのお言葉として『川柳は芸術である事を今信じない』『川柳は知的方向に理想を置いてゐるものである。詠嘆とその直観的批判性によつて価値を定められるものではない』とありました。

川柳に對する風当りは厳しいようでありますが、それだけまた御意見は御意見として拝聴すべきものがあるだらうと拝察します。永瀬さんは詩集もお出しになつており著名な方であります。何卒よろしく御配慮の程お願い致します。——後略——

私は「機会を得て面接致します」と山雨楼先生に約束したものの永瀬先生に会いに行く勇氣がなかつた。当時私は全くの駄出しの若輩で、詩の知識もお粗末で川柳に對する自信もなく、偉大な詩人の而も川柳に對してはかなり痛烈な識見を持つておられるときく永瀬女史にすつかり氣おくれがしてしまつたのである。

爾來三年——山雨楼先生からはこの私の約束不履行について一言も触れられないまま、私も何故永瀬先生に会わないのかの弁解もせずして月日は矢の様に流れた。然し私は胸中もつと勉強して一人前の川柳家となつて永瀬先生を見記を、モノにしよというタクラミは捨ててはいなかつた。然し先生の宿願はそれを許さなかつた。私は今、三年前の約束を果し得なかつた、而も一人前の川柳家になつていない私の非力を思うて慚愧に堪えないのである。

疲れをばし 体力をつくる

武田の綜合ビタミン剤

パンビタン

30錠・100錠 他に 液・末・M・注

武田薬品

作家とその死

久保和友

福田山雨楼さんが死去されたといふ知らせは何か大きな樹が崩れ落ちる稲妻のあとのようなすごい落雷を思わせた。私のある友だちが人の死を、それも極く親しかった人の死を、春の流れる星だと表現していたが福田さんの死は流れ星のようなおとなしいものではなく轟々と音たてて流れる身を切るような冷たさの雪解川を思い出した。そこには精神のきびしさがある。思うに川柳家を二つに大別すると何という川柳はやるだけのことはあると思われような面白おかしい人と平常はむつかしい顔をしてゐるのにどうしてこんな楽しい温か味が生れるのか不思議に思う人と二つに分けられると思う。前者は軽率を意味しないし後者だといつても人なつっこさがあることは確かで何かに対決していてそれでいて川柳を生涯の友としてやうて川柳に生き川柳に死することゝ悔いしない。川柳家にもいろいろあるがそこには大と小があつて川柳家だと名乗つていても川柳の打ち込み方がちがう。これはどんな世界にもあてはまることであるが川柳が本当に伸びるためには川柳に死していいという人だつて出て来る筈だし、出なければ嘘である。福田さんはこのどちらの人で

あつたかは詳しくは知らない。私が言えるというこゝとはいひ先輩をもつたということではなからうか。私も国鉄につとめてゐるが国鉄の職員のかへ大きく川柳を入れていつたといふことはやはり先駆者としての力が大きい。いま国鉄四十五万のなかにゐる川柳家はいくばくも知らないが国鉄のなかへ川柳をもちこんだということの業績のなかに幾多の先輩と共に福田さんの名を忘れてはいけな中退かされたが福田さんの意志は立派に受けつがれてゐるのである。まだ全国的なつながりは出来てゐないが日本のどこかで国鉄川柳大会を開催しなければならぬと思う。これが福田さんを始め多くの先輩に伝える道だと思ふ。福田さんは書いて書いて書きまくつた人だと思ふ。これは出来ないことである。川柳家である以上、一日としてペンを忘れてはいけな川柳家ではないか。句だけをつくるのが社会時評もするべきだしいろいろ活動をするべきである。ペンの力が福田さんの病気を長くさせたのか、ペンの力がその病気の抵抗力となつて何くそという力を生み出せたのかはわからないが川柳がある限り、ペンがある限り福田さんは幸福ではなかつたのか。そういうことを思うと福田さんがいろいろ教えてくれたことは何事にも負

けず書くといふことではなからうか。冥福を祈りたいと思ふ。福田さん。御苦勞さんでした。

あらざらんこの世のほかの思ひ出に
いまひとたびの逢ふこともがな

1百人一首より

お人柄を偲びて

出口白猫児

山雨楼先生のお人柄については常に誌上を通じて、句を通じて我若い世代の者に教えられる点が多々あつたと思ふ。殊に死に対処しながらも、片時さえ忘れられなかつた作句意欲と、常に柳人の和を説かれていたことは、後に残つて柳界に立つ私達に与えられた大きな警鐘だと思ふ。山雨楼先生は生前常に「親しき仲に礼儀あり」を座右の銘として川柳に励んで居られた。川柳界に於て人の和を欠くようなことがあれば、それは川柳の発展にブレーキをかけることにもなり、心すべきことであらう。私は川柳を愛する者の一人として深く学びたいことであると思ふ。

阿部佐保蘭

福田山雨楼君の死を知りたく胸を打たれました。川柳の識者に理解深く新聞の切抜を送つて下さつた御厚意はいまだに忘れません。晩年病氣になられたが、よく

麻生葎乃著・米田三男之介装幀

葎乃句集

福壽草

定價二百五十円
送費 三十円
菊半型・函入

本書は川柳の母、麻生葎乃女史の異色ある作品の金字塔です。五百部限定出版ですからこの機会を逸したら再び手に入らぬものです。即刻注文願います。各方面から御好評をいただけて居ります。

麻生葎乃女史六十三回誕辰記念

葎乃句集刊行会

委員長 北川春巢

大阪市住吉区万代西五の二五

最新刊

発行所 川柳雜誌社

電話住吉(初)六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番

病に打克つて川柳の為に尽された功績は後世に伝えられていゝものと思ひます。

川柳のその一筋に生き抜いて

松岡町二

嘗ての日よく逢ひ、遙えば川柳の語に終始した懐しの人、山雨楼さんの死を悼みて

寛げし浴衣の胸の計にうたる

前田伍健

詰襟の思ひ出山雨楼忌日

大島満明

白木檀音なく落ちて雨暮るる

本田恵二郎

No. 338の川雑へ焼香し

北 夢之助
つゝい会えぬ友の計をきく虫時雨

大野風柳

はすの葉の冷たき露にさえ涙

葎乃「福壽草」の正誤

▼六二頁一行目の「How of

「How of」の句は著者の句でなく、著者

が選句された句を誤つて蒐集した

らしいので取消すこととした。作

者、著者ならびに「福壽草」を購

読していただいた方々に本誌上を

借りて深謝することとした。

葎乃句集刊行会



路集

大鶴喜由選

石女の顔によく似た犬を連れ
お隣と犬のことから仲が割れ
千鳥足犬も吠え、よけて行き
日々に快し犬連れて出る程の足
犬を呼ぶ口笛だけは母も吹き
捨て犬の声に善人ふと迷い
親に似て犬を恐がる子に育ち
蝶々に仔犬がジャれる午下り
犬うつら／＼玄関に陽が当り
犬にまで夫婦のもつれ廻つて来
一升で足らぬという犬を飼ひ
捨てられた子犬ありたりの声で泣き
犬の居る家はとほして物賣い
同
香林
別城
富士子
貴美
星浦
春日
紫茶
一太

犬抱いて旦那の下車を待ちつゝ、黒天子
闇の道へスベスベと呼んで通り抜け、潮風
寝そべつた犬の欠伸にうち込まれ、貴通
犬とりに頭を下げて握らせる、同
草野球フィールドボールを犬がごり、一休
押売りへ犬はむつくり立ち上り、代仕男
野犬もう人の情に親しめず、藤吏郎
声出さず隣の犬を追つぱらい、晃康
捨て犬は捨て犬なりの生きる道、季
犬の子を玩具にさせる子沢山、同
をない云いなほんなど犬も乗せ、ひか平
番犬に頼る油断につい盗られ、とも子
みの虫へ犬は思案の首かしげ、善坊
小犬じゃれつく夜の未亡人、同
犬の子を貰うて愛称子等と練る、六竜子
愚鈍にも見える養子を犬が好き、光郎
未亡人氣性の荒い犬と住み、堀子
焦つて二号へチンはまた孕み、同
炎天へ犬は忙しい舌を見せ、素
別荘の犬がごみ箱あさりに来、有子
校門で可愛い犬へ鞭を当て、万
うちのボチ隣のミケにいじめられ、春也
キヤデラックお犬様がかしこまり、一也
立話犬は行つたり戻つたり、十九平
犬にも御馳走が来る目出たい日、不二
叱つても犬逢曳へついでくる、百郎
開店へ犬の御飯は忘れられ、光二郎
コップ酒ノツリ犬が揺へくる、素
嬉しさに犬はへの字に駆け廻り、辰
乞うる身も忘れ玄関の犬とじゃれ、とも子
叱られて小犬を拾つた処まで、堀子
犬は尾を二号はお尻ふつて出る、花田子
御近所の人で一声吠えただけ、立
飼ひ馴れて犬の願いが聞きとれる、兄

ビルディング

八木摩天郎撰

花をがれた。谷間の金魚売り
 ビルディングお上りさんに見上げられ
 角ばつた影を投げてゐるビルディング
 飯庁舎ビル建つ日を夢みつゝ
 焼酎果てた利休の町にビル建ち
 父ちゃんのビルの勤務は掃除人
 チンドン屋鳴りやみそめたビルの街
 アメリカが見れば平屋のビルディング
 ビルディングこも手形で悩まされ
 ビルの窓手まねで何か云つてゐる
 赤字とは思へぬビルの夜の景気
 ビルディング夜の大川に灯が流れ
 ビル街をまっすぐ抜けた急な用
 ビルディングの谷間に恋の花が咲き
 ビルディングの陽溜りにいる靴磨き
 陣笠のくせにビルに蟠居して
 ビルの窓みな開け切つた雨上り
 四五軒の隣りを暗くさせたビル
 点線でビルの身投げが見直され
 金文字の看板派手にビル事務所
 ビルの下落ちて来る歩を早め
 月曜のビル日曜の重い足
 ビルディングこんなところに草が生え
 新聞へ庇を貸したビルディング
 ビルディングこころも元は麦畑
 蜂の巣の様にも見えるビルの窓
 こころ又証券ビルの板囲い
 アドバルンビル釣上げそうに揺れ

芙蓉 鳥石 井蛙 良坊 正郎 雪山 幸郎 光古 万古 圭水 ひさし 夜潮 黒天子 善坊 勝城寺 酔子 へとち 豊年 有子 静観堂 好日 貴美 光男 一三天 保夫 代仕男 百郎 季贊 五茶

倒産とは見えぬ明いビルの窓
 受付は五階にあると聞いたビル
 ビルの窓ウインク混線してしま
 梯子車が行くからビルの火事らしい
 ビルディング散髪屋も望を借り
 老守衛冷きビルと共に生き
 貸ビルにインテキらしい社もまじり
 ビルディング見上げてまの柱を教え
 御神輿もここは素通りビルディング
 ビルに住んで女独りの生活費
 受附は美人を置いたビルディング
 インテキの会社にビルの部屋を貸し
 高いほど安い家賃のビルディング
 ビルディング身売りの話もう出とり
 一室を借りてもビルを載す写真
 ビルが建つ話に飽きてゐる都会
 ビルディング息子訪ねて行て迷い
 町内へ関せず焉とビルディング
 ビルディング建てても祭る正一位
 (佳) ビルの谷路樹だけにある詩情
 (佳) ビルディングの下で展台の並ぶ夜
 (佳) ビルディング緋のまじり灯を点し
 (佳) ビルディング組んだままへ吹き
 (佳) デフレ風鉄骨組んだままへ吹き
 (佳) 一軒の平屋がビルを建てささず
 (人) 大都会ビルの腹から電車が出
 (地) ビルの窓故郷の夢恋の夢
 (天) 株の値を気にしてビルのドアを押し
 (軸) 少々の地震は知らぬビルディング

柳見 香林 賀峰 惠三朗 藤司 洛醇 紫茶 春日 牧人 十悟 トン坊 洛醇 葉光 星浦 別城 賀峰 満秋 千容 太路 秋香 十九平 ひか平 香林 光郎 春也 一夜 無鬼 雄々 摩太郎



百姓の掌に吊皮を驚づかみ 岡山県

療養の窓にビールの広告塔

守護神のようにヌードを貼って 岡山県

追いつけば次の流行待っており

雁首の揃った飲屋でよく流行り 京都府

おきまが うちマダムのお気に入り

左前に着ぬだけがまし和服の娘

豊作の陽に照らされている稲田

無料バス帰りはスッテンテンで混み 天理市

ふところの寒さへ暑中見舞状

傷心の酒を女給が相伴し

妻のブラン闘争中の夏期手当

おちよぼ口ソフトクリーム舌で 大阪市

恋捨 日 から嫌いになったジャズ

市場 第一円安い逆戻り

調査ではおどしの効かぬ子に育ち

親しさの膝を崩している団扇 神戸市

親子して浪人菊の芽を育て

初対面から打解けて同じ趣味

天理市にて

拜殿へ坐って拜む手が踊り

君に似てブツッ切れた三の糸 大阪市

窓あけてパーマに宵の風をうけ

三味弾いてあげて仲居と間違われ

潮花さんの舞地をして

舞扇糸の乱れを気づいてい

姉さんの化粧の手順おもしろく 天理市

小野花団子

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

書き出しを友の手紙をまねて見る

古新聞こんな特売見のがした

ヒステリーのように風鈴鳴りつづけ

売出しデフレがこっち向ことせず 大阪市

昔風の考えで気が若いだけ

枕蚊帳極楽風の場所を選び

酒癖が知れて祭も呼びに来ず

素顔では言えず吞めば寝てしまい 岡山県

ふく料理誘われ急用思い出し

父は禿母は白髪で娘は縮れ

噂ほど貯めてはおらず新仏

いたわっていたわってむくゆで卵 大阪市

色変えて変えて紫陽花疲れ果て

帰省して空気の味と水の味

繻帯の白さと外科医から帰り

バンガロー寝冷えして来てほめち 兵庫県

お生花のような娘でつきあえず

サンガラス烏打帽と刑事めき

手をひいて呉れるお方が居る悲鳴

眼鼻立ち一座に惜しいのが一人 広島県

税務署をもてなす団扇見つからず

飲まされて買いたした者売れ残り

自転車に乗れぬいい娘で惜しま 大阪市

どの子も可愛い酒の肴を分けて

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

まり主要原料が鶏卵)なので名付

けたもので大きから云えば雀の

卵まんじゅうと云い度い。

名菓と云えば伊予西条市の名物

に「ゆべし餅」と云う菓子がある。

非常に風味は豊かだが包装が

竹の皮包みなので一見味噌の塊り

の様に見える。かつて西条の人が

東京の知人にこれを送った処、何

にも知らないその人は精製味噌と

勘違いして味噌汁(ゆべし汁)を

拵えたところ話があるが、斯うし

た名産には詳しい説明書を添えな

いと飛んだ間違いが起るだろう。

石田一松氏にでも聞かせたら

西条名産ゆべし餅を東京の

知人に送ったら

味噌の塊りと勘違いして

朝のおつゆを拵え上げて

変に甘くて大騒ぎ

位のノンキ節になるかも知れな

い。

帽子談義

大西八歩

大阪の奉公先が帽子屋だった関

係で、果により国によって頭のサ

イズに特徴があるのに気がつい

た。出雲と北陸の加賀・越前地方

は大体大型で後頭部の発達が特に

目立ち、鳥取地方の子供達が云う

所の後デブと云う恰好である。こ

の人の帽子は大抵七吋以上でな

ければその用を弁じない。中にそ

の数は僅かではあるが前後共発達

した所謂さいづち頭と云うのがあ

る。

三木 檜林

高島 玉兎

高島 玉兎

高島 玉兎

高島 玉兎

高島 玉兎

高島 玉兎

高島 玉兎

高島 玉兎



陳情の淋しさ隅に坐るだけ	大洲市	米沢 暁明	ダリヤは赤し俺らも恋をしてみた	同
大写し涙一滴見せるため	同	同	手習	同
そこらまで歩くに煙草だ懐中だ	同	同	ハンマーより筆の軽さに肩がこり	同
別荘へ来ても電話で攻められる	同	同	若い気になりみつ豆についてゆき	同
毒食わばイカのサシミも頂かん	高田和	岩垣日本村	旧仮名の母も吊つて星祭り	同
しやなりくと高校生のバンガロー	同	同	新婚の旅に悲恋の寺を訪い	同
金魚鉢人の吐息に似たあぶく	同	同	窓口の儲けはフタをして算え	同
糖衣錠でも引つかゝる小さい咽喉	同	同	すごいアルコール分だと蚊もあま	同
映画の帰りチョップを闇へ打ち	兵庫縣	前川左文字	興奮をすればお郷里の言葉が出	同
三本目からは妓で飲むビール	同	同	貧乏人に飼われて猫も麦食べる	同
死んでいく日が嫌だけど金魚買	同	同	心中未遂健保で頼む照れくささ	同
局員に縮めて貰っている電報	同	同	漫才を聞くに短波のラジオ据え	同
そこまでは僕も知ってる裏話	出雲市	竹原 雲平	ツルリッと呑み込めそよ月が出た	同
骨盤に祖母カサコンというばかり	同	同	二千八百カロリー鯛玉葱茄子麦飯	同
酸い辛い噛みわけ結局孤独なり	同	同	洗濯機朝顔咲かす暇が出来	同
背の子はもう寝て村ののど自慢	同	同	M R A 馬鹿正直もいいうな	同
宿題の母に解らぬとこが増え	京都府	松下京一樓	ボナスを破って母のものを買い	同
ドンチャンの下で徳利の数を読み	同	同	生活が母の病床までたたり	同
ろくすっぽ噛まずに喰う祖母達者	同	同	落し物届けて二割ヘケチをつけ	同
残業の腹たこ焼ですましとき	同	同	万物の長で慰籍料やつと取れ	同
三人目相談すくの子が生れ	山口縣	岡本 鳥石	塩は何処砂糖は何処かと手伝う気	同
百姓がみんなきらいな娘が五人	同	同	水都祭ローカルニュースで聞人出	同
夏足袋をはけば病氣かと聞かれ	同	同	病人の僻みを婦長持て余し	同
天の川流れ込みそな窓の位置	愛媛縣	村上 旭童	歯を抜いた妻に附合う冷そうめん	同
腕時計バンドへさげて草を取り	同	同	役得は砂糖を浴びるほどもらい	同
B 1 へ元ボン中の腕をかり	同	同	パチンコへ行く金はある洗濯機	同
K K は五十円にも領収証	鳥取市	北村 三歩	高利貸子供の慾をしかりつけ	同

るが、これは帽子屋泣かせの型で7時30の太時を持って来てはまだ充分とはいかない。伸張器の御厄介になって引伸しやと頭上に納まると云う始末である。

島根県でも石見の国に行くと出雲とは反対に頭が小さく、小時の6分と云う超小型さである。この頭は明らかに朝鮮系に属して、太古半島よりの帰化が多かつた事実を物語るものである。

大國主命は出雲の神様であるが、出雲人である以上頭は相当大きかつたのではあるまいか。神話に依ると神代時代には出雲と越の国(現代の越後地方)との交易があつた事が記されているが、人種の交配のあつた事も推察される。さすれば島根県の出雲地方や新潟・福井県の人々に大頭が多い事は理窟に合う訳である。

頭の大きい人は概して身体が毛深い様に思われる。これはアイヌ人と何か深い関係があるのではなからうか。太閤記に出て来る北ノ莊(今の福井市)の城主だった柴田勝家は福井県の代表的な人物で胸毛あく迄黒く、容貌魁偉のレスラー向きの武人であるが、その頭もおそらくは七時以上の大型であつたと思う。自己の信念をあく迄固持して秀吉を向うに廻し、一歩も譲らぬ気概は現今の北國人氣質に連綿として脈打っている。北國の地が門徒宗の金城湯池として、東本願寺の米櫃になつてゐるのも



水かけ論ニヤニヤと聞いてゐる 大阪市 藤村 梨花
 星にもう詩を感じない夜を濯ぐ 同 同
 たわむれの指へ抗議のバラのとげ 同 同
 風いれる団扇がリズムにあう若さ 松江市 橋本白郷子
 恋人の便りを母の手から受け 同 同
 満足な顔して妻の貸し浴衣 同 同
 童謡を歌つて妻で子を産まず 半田市 岩川 一貫
 日曜の靴を磨けば歌になり 同 同
 熱帯魚までが興奮してしまい 同 同
 十代の悩み吹くとぶヘイマンボ 金澤市 松永 恒青
 即決をジャンケンボンでする若さ 同 同
 行水をしてから汗の用が出来 同 同
 雷にもなれた田舎の妻になり 岡山県 西山 晴々
 衛生の完備が月賦の冷蔵庫 同 同
 扇子だけ貰うて掛けにして帰り 同 同
 給料日寸前にこ焼でも食おうか 大阪府 谷沢 好祐
 ノースリーブ腋の下迄手がかり 同 同
 アルサロへ勤め夜道を口笛で 同 同
 失業の朝寝も今日の予定なり 出雲市 三吉 美好
 あの瘦軀何処にビールが入るの 同 同
 日雇の日やけの肌が羨やまし 同 同
 闘争のボーナス妻に皆取られ 倉敷市 野田 一念
 さのさ節唄ってボーナス解け 同 同
 雷に節もつせずに南無阿彌陀 同 同
 土人形美容体操憐れがり 岡山県 坂手 有子
 世話人の面子を云うて寄附を出し 同 同
 お詣りに出る日の化粧よくのびる 同 同

自家用車持つての方が借手なり 徳本市 岸本 木魚
 自家用で口の達者な代理来る 同 同
 十本の茄子に日覆をする杜宅 同 同
 スカートをひろげ彼氏の席も取り 大阪府 林 冗歩
 寄附帳の後から祭やつて来る 同 同
 モデル分譲住宅展を見る 同 同
 金のない奴が間取りにけちをつけ 同 同
 晩酌の量が過ぎて妻の留守 高知縣 建沼 呆亭
 スランプを口実にした酒を飲み 同 同
 力道が危いせい肩がはり 同 同
 ワイシャツが特価ランチに集 神戸市 仲どんたく
 アスファルトの込む街に鏡を売る 同 同
 本能がブロレスに血を沸き立たせ 同 同
 一枚のハンカチへアベック腰を 西宮市 新井 酔子
 再度山にて 同 同
 恋人の陽焼け魅力が一つふえ 同 同
 二人切りで居ても驚鳴いてくれ 同 同
 仕事よりマンボで靴を痛めて来 倉敷市 藤井 五茶
 麻雀よりましカメラへ熱を上げ 同 同
 野次馬の一人カメラをもう構え 同 同
 青野ヶ原演習場 同 同
 骨の無い胸へ砲声容赦せず 兵庫縣 吉原 紅月
 襟足の白き浴衣の藍が好き 同 同
 キリギリス俺もキウリの日が続き 同 同
 安静二度の屈かぬ距離を蠅は知り 大阪府 藤本 千永
 七十でもまだ一寺の歌舞伎好き 同 同
 さゝやかな贅沢ビールの泡こぼす 大阪市 長谷川 兎風

故なしとしない訳である。
 僕が十九才で帽子屋に入店した頃は今から三十年程前の昭和の初めであつたが、その頃は冬なれば中折帽子に鳥打（ハンチング）、老人向きに東洋帽と云つて北欧のノルウェーあたりから伝わつたと思われるシールド地の帽子、夏はバナマ帽に一文字帽（カンカン帽）が全盛であつた。カンカン帽等安物は五十銭位で結構一夏は凌げたものである。今ではカンカン帽の姿はほとんど見掛けなくなつたが、内地産の変種を編んで型に入れ、糊で固めたもの故一度夕立に出会ふと、船場の番頭達は慌てて帷子の着物の内懷ろ深く帽子を押し込んで駆け出したものである。鳥打帽子も戦時中は追放組の一つで、中折帽と共に国防色の戦闘帽に圧されて姿を見なかつたが、近頃ボツボツ現われ出した。鳥打帽は旅行には最適で汽車の座席の空いている時は帽子を冠つたまま横に寐られる特典がある。戦闘帽が影を潜めた後は登山帽が一世を風靡した。團屋のオッサンも登山帽、県庁の御役人も登山帽、大学の学生も登山帽で一時この帽子が我が世の春を謳歌したものである。
 農家の作業用には一部の人はが用いる檜笠や菅笠を除いて、今も昔も絲木帽が麦稈帽であるが、この帽子は海水浴用としても広く一般の人達に愛されている。



看護帽のせて個性は殺しとき

博士号取った名刺又呉れた 貝塚市

だんじりが産婆へ急ぐ歩を阻み

父知らぬ子が父に似る歩きぶり 米子市

哀れさは蛙爆音と張り合う気

痰を焼く煙り微熱の窓に見る 石川縣

清拭の一と拭き毎に婆婆近し

子沢山赤子を荷物の様に負い 大阪府

アベツクの野郎胸勘定で車止め

お氣に召す品は予算にチト合わず 大阪府

午前二時都会の空気が澄まぬまま

海でさえ喜怒哀楽を波に見せ 岡山縣

半分はあなたの趣味へ着る浴衣

退院する人に

婦去来空気の美味い山の家 貝塚市

宗旨変えても命延ばしたい

トクホンも効きません注射に來 岡山縣

冠婚葬祭ボスはよう動き

退院の足でこわく耐の味 貝塚市

一舟の西瓜で押さす登り坂

見ぬ振りをしても見るは恋なの 河野市

パーマかけた娘の顔も艶に見え

今年から二人の智慧の糸瓜棚 天理市

ルンペンの隣で犬が欠伸する

高野山へ来てまでジャズを聞き 貝塚市

来ぬ人待つパチンコがよく入り

見渡せば貧しい国の妻の色

婦唱夫和テレビの当る方を買 松原市

仏にも鬼にもなれず今日も暮れ

思い出し笑い女房の腫を逃げる 大阪府

人生の道草これも修業さ

螢光灯煤けた天井へぶら下り 大阪府

ウエストは飄箆程に絞ってみ

砕けるもよし当るのだタンゴ聞く 西宮市

陽焼けた顔で言えない恋が言え

若作りまだ跡取りもよう産ます 松原市

泣き面に蜂とは妻に病みつかれ

失恋にコンパクトまで仕舞い込み 大阪府

新調の服にタクシーまで止まり

衣食住足りて女にもの足らず 米子市

美人にも今年の顔と云うがあり

倒れそうな家が立退き反対し 堺市

特売場出ればAラインの颯爽と

口説かれる事も人気よとは女給 美祿市

趣味は読書Y本ばかり読み

敬遠をされて代打者顔が立ち 島根縣

温泉を飄箆でバスが落ち

映画につられ宿題の捗がゆき 大阪府

顔ぶれの違う電車に乗る遅刻

境内の鳩は幸福そうに飛び 滋賀縣

四十の若返りという座が開け

反省は阿呆になれないことばかり 大阪府

同

万濃 修

同

児島与呂志

同

正口 辰始

同

徳永 貴美

同

土守トシ坊

同

西岡 洛醇

同

井上 戯耕

同

辻 圭水

同

安平次弘道

同

景山 綾美

同

山本 立児

同

久保 和友

同

青柳扇子仙

帽子もその種類は数えるのにいとまがない位沢山あるが、流行の激しいのは子供帽に婦人帽である。僕が在店中、婦人帽でボンネットと云う型が流行したが、この帽子が今から考えると恐しくものしい代物で、はりぼての上を別珍か何かの布切れで覆い、これを冠る婦人と云うのがその時代のインテリ階級で、先ず女学校の大年増教師か産婆さん等と云う人達であつた。

この帽子を冠ると背丈が二、三寸位高く見えて、六頭身の女性が忽ち八頭身になると云う、松旭斎天勝の作品みたいなシャッポであつたが、元來がはりぼてのごまかし物故、誤つて重い物の下敷になるものなら、もう落花狼籍、目を覆わしめると云う至極危険な帽子である。

そのボンネットを米子市の或る洋品店で僕が註文を聞いて送つた迄は良かったが、時季が過ぎて売れなかつたと見えて、六個入りの大きな紙函を返却して來た。店の主人も流行品の事故こんなダルマの化物みたいな品を来年迄ストックすれば損害を蒙るのは必定と云う訳で、到着するや否や、又米子へ送り返したものだ。米子でもこれは敵わぬと又々大阪へ戻し、大阪も意地になつて又米子へ送り、野球のピッチングのボールの如く、行つたり來たり米子、大阪間を三、四回往復している内に函の



ボーナス日妻デパートで待つ云い 山口市
女大出て母に天賦羅習つてゐる 同
不渡を出すとは見えぬ洗濯機 八代市
冷飯を喰う女房の方が肥え 同
大袈裟に行商汗を拭いて見せ 岡山縣
恋人もないうきみしきの雨の夜 同
晝替えして倦怠期やり過ごし 安来市
保母さんの休日やんちゃ娘にかゝり 同
十銭と云うて時代すれ笑われる 大原市
社長何判るかと職長さん気焰 同
出稼ぎへ父に内緒の送りもの 平田市
本職のカメラが閑な観光地 同
国宝の仏像のぞく客ばかり 新潟縣
寢棺あつた跡です此処も文化財 同
この十年ジャワの踊子まだ恋し 伊丹市
帯革の金具は大学仕上工 同
添われない愚痴を言い／＼逢ふ 福岡市
台風特報嘲ける様に鳶の舞う 同
金魚の死筆頭に書き子の日記 西宮市
女傑ともなれず毛虫にとび上り 同
恩給がついて再軍備論者にし 岡山縣
財布から出す黒焼へすぐに惚れ 同
放つとけぬ性質と居直るのに困り 四宮市
もうみんな寝る頃生きている濃く 同
本社川柳まつりに参加して 同
靴すらりもう大阪は恐いとこ 兵庫縣
大阪で飲んだビールの味を褒め 同

田中 秋穂
同 満田 銀風
同 石原 文郎
同 遠藤 風車
同 丹波 太路
同 久家代仕男
同 高野 不二
同 小川静観堂
同 岩田十三楼
同 片山 鏡水
同 池田 古心
同 東浜 成詩
同 岡沢 凡志

三等でよろしいがなと世帯じみ 岡山縣
長患を見舞う積りの菊を植え 同
どの党も貧しき人に味方せず 津山市
三十分も話せばつまらない女 同
痛恨の弔詞に功を盛り切れず 宇部市
安静へ嬉しい人の来る動悸 同
ハイヒール一分の際によろめいて 大山市
食うだけの望みガードの雨期続く 同
フン／＼と赤い言い分吐かせるとき 貝塚市
傾いた軒でも都会へしがみつきの 同
失業を知ってか犬もついて来ず 大槻市
七坪の家も建たぬにビルが建ち 同
大安売俺にお金の無い時だ 鳥取市
からすの子からすで良。だ平凡で 同
世渡りは曲りくねった道を行く 宮崎市
母ちゃんの背よりも高くまだ甘え 同
借金と言訳に行く浴衣着る 七尾市
又故障ですか隣のオートバイ 熊本市
わが心また弛みてか子に病まれ 笠岡市
博学の屑屋人生観を説き 堺市
療養の部屋も七夕迎える気 大府
大峯登山紀行

宗森とも子
同 定金 冬二
同 岩原 滔川
同 藤田 凡々
同 小島さぎす
同 富永 建朗
同 岩田天保銭
同 野口卯之助
同 松高 秀三
同 安永 理石
同 木山 遠二
同 田中 狂二
同 堀 須賀太
同 平井 良児
同 井上 鴨水
同 中谷ハナ子
同 舞島 白露
同 鍛永 晶平

中のボンネットはくたくたになつて姿が崩れ、見るも無残な恰好になつて了つた。いつ果てるともないこの勝負は買方の強さで米子側に凱歌が上り、遂に大阪の主人がシャッポを脱いでけりとなつたが、お蔭で註文を聞いた僕も一ヶ月位主人から小言を云われて閉口した想い出がある。

終戦後都会のインテリの間に、無帽主義を唱える者が出て来て、帽子の売れ行きに悪影響を与えたが、間もなくアメリカヤソ聯の原爆実験で日本の上空に死の灰が降り始め、インテリと雖も大切な生命には替えられぬと、帽子屋の店頭へ駆け付けたる次第となつた訳である。

無帽主義放射の雨にちと慌て

八歩

前進すること

日置文郷

本誌七月号を読んで久保和友・森本藤司両氏の時事川柳に対する熱意と愛情に感服すると共に、私も大いに教えられたことを告白する。

私は五月号で消滅時事川柳を否定したが、当時説書熱に煽られて他の文学と比較した際、川柳の特質を聊か軽視し過ぎたようである。当時私はスランプでも何でもなく純粋な心境で書いた時事川柳観であつたことは今でも断言でき



如露の水鉢から鉢へ虹を張り	關山縣	浜口志賀夫	掛時計時代がかった音で鳴り	玉野市	追田美婦適
洗面場今日が始まる水の音	關山縣	東 靜人	按摩もギャングも見えサングラス	食敷市	森永多華子
病めばとて大志は捨てぬ若さあり	貝塚市	杉本 一鶴	ビヤ樽のようで遺家族と云う社長	京都市	木下風太郎
猿沢へステ、コ紳士寄って来る	天理市	阪本 貴通	薦の輪の高さに据った天守閣	出雲市	神門 伯羊
五頭身ファッションショーへ振り向く	大阪府	稲葉 好子	買物に行くとは見えぬ妻の服	京都市	本谷たゞし
イヤリング虫も殺さぬ顔で釣り	關山縣	大石 一久	女房のヘソクリ見付けた土用干	堺市	富山 雪山
花を切るナース見違ふノーマスク	關山縣	岡 一門	山羊の踵へ立小便の罪を詫び	出雲市	長廻 量行
淋しさは子へ値切る事を教える日	天理市	藤井 千年	試験期は母が鉢巻締め直し	尼崎市	山崎さつ子
月が出て恋も出て行くテント村	貝塚市	岸 優	面会へ髭剃る程に療友は癒え	出雲市	石橋 正好
お茶を飲む手付は勝負と云う女	大阪府	西本 保夫	お中元わが家へ臨時停車する	大阪府	伊藤 光二
高原の雲黒百合に触れて過ぎ	貝塚市	鈴木 鈴彦	末っ児は貰った下駄を蚊帳に入れ	尼崎市	林 澄子
血を売ってスマートボールに取らる	食敷市	小野 広志	設計図妻が慾ばる台所	松江市	原 章坊
公約が泣きます心中が大流行	下関市	宗貞 白馬	就職の喜びスリッパなど揃え	關山縣	佐藤龍山坊
冷蔵庫二人暮らしは味噌も入れ	堺市	渡部 紫茶	雨宿り此処も破れ障子の家	宇都市	神田 豊年
マンボを土産に置いた慰問団	關山縣	阿部 四郎	紅一点上げたりさげて酌をさせ	笠岡市	佐内 隆文
子と笑う夜があるから苦勞もし	關山縣	山田ゆき江	商魂は話まどめてお茶する	廣島縣	山田スミ子
肺患の血でも平気で蚊は吸うて	大阪府	加川 大然	病人と一緒に妻もやつれて来	關山縣	池田 文女
妻の髪かけ直したい俵給日	石川縣	山崎 北柳	水鳥が雨宿りしている豪雨	關山縣	米 豊年
短冊が梅雨に濡れてる星まつり	關山縣	亀井 星浦	青春が階段登るにさえ溢れ	高知市	有友 玲羊
大公望の眠気さましに浮子動く	關山縣	淵川 秀敏	生活の保護へ眩しい子の晴着	和歌山縣	木下 一休
雨も良し疲れた足を子に踏ませ	愛媛縣	藤岡 博人	教養がなんのと眉の線を引き	高知市	小松 梅林
紙芝居日暮を焦る物語り	今治市	池内 好日	故郷は雲までのんびり流れてい	關山縣	大橋 游子
太陽と一緒に我も跳起きん	關山縣	片山 百郎	青春を謳歌としては悔いている	神戸市	佐野盛気楼
八起き目は時代が既に變つてた	食敷市	横山 生二	顔ぶれを見て焼酎ですましとき	兵庫縣	前川 越山
ワイシャツをまき上げてる事務多忙	神戸市	西田 幸	良いミシンだけど晴着は他に頼み	貝塚市	伊藤 瓢一
大過なくとは勇退の言うセリフ	高田市	森本 藤司	たゞ逢えただけで此の世は春と	大阪府	原田つとむ
実盛の故事とは別な髪を染め	吳市	青木 微醉	顎かゝえ来たのに齒科は鑑かけ	大阪府	半田 夏生

るが、正直に言つて投稿後私の心の内部に於て種々疑問が生じたことは事実である。外部からも数多くの人から意見をきいたが、森本藤司氏の文章の前半のような意見が多かつたようである。

只、私は「何の為に詩を書くか」書かずにはいられない」であつても「川柳」娛樂」では断じてないと確信している。で、最も多く衆人の眼に触れる時事川柳から、軽薄な句は努めてなくしたいと考えている。

私は三年間郷里を離れていたが去る六月十日帰宅してみると、北条平野はもはや三年前のそれではなく、河川は場所を変え、完全に区劃整理された水田はスマートな線を天に映し、部落中央の放送塔からは「生活部からのお知らせでございます……」と、近所のオパサンの声までが、何かしら新しい呼吸を感じさせる。人々は放送塔から流れる爽やかな民謡を聞きつつ重い蓑を捨てたビニールの軽装で田植をする。

外形ばかりではない。昔の用水の争奪は「如何にして豊富な水を引くか」を協議するところまで進んで来て居り、病虫害に対しては共同消毒を実施し青年は試験田を設けて研究している。

三年間——私にはこの三年間が余りにも永過ぎたように思えてならない。

前進すること。前進あるのみ。

川柳第二教室

用語について(研究題「ことば」)

戸田古方

「撞」もことばで知らず鐘を撞(突)き 素泉

投句の中に素泉さんからのハガキが二枚ありました。一枚は普通の投句、他の一枚は訂正の為のもので、この句の「突」という字を「撞」と変えてくれというのでありました。

この間、縁があつて出かけた俳句の講座で、お宮の「モリ」は「森」でなくて「柱」だとか、「楽」の「たのしみ」ではびつたりとないので「愉」をもつてきて複雑な内容をどうやら盛り込めたりしました。

漢字のもつ象徴性は千万言を一字で表現しているのです。川柳は平言俗語でいいとはいふもののやっぱちつとはこんなことに気を遣わねばならないと思いました。

「突」も「撞」も「ツク」と読めますが、鐘をつくのは「撞」の方が見た眼にも、内容的にも美しく整っています。

「大声は地声だと言葉の機が

立つ 柳 雙

「見合の場よそいき言葉舌纏る 正男

両方ともわざ／＼「稜」「鏗」の文字を使わなければならぬかどうか、研究の余地が充分あるようですが、これらの文字を使った為に多少堅くはなつてはいませんが、「稜」は単なる角でなくて「稜威」と熟語になるように権威を感じさせます。「鏗」は目からくる複雑さはあるようです。それは「連」の字から来ているのでしょうか。

しかし同時に漢字の誤った使い方には気を付けなければなりません。

「通訳に便りきりにてきくことば」

の「便」はあきらかに「頼」でなければならず、怪しいと思つたらむしろ仮名書きにされることをおすすめます。さきの「鏗」にしても「もつれる」と書いても結構感じは出るのですから。

今月の研究題は仮名で「こと

ば」としておきましたが、相当漢字の「言葉」で詠まれている句がありました。

「大臣も酔うて来たらし国言葉 微 醉

の「国言葉」は「大臣」という役柄のかたさよく調和しています

が、嘘でよし病母も喜ぶ此の言葉 一 太

の「此の言葉」はむしろ「このことば」の方が柔らか味が出て適当であつたと思います。

「ふるさと」を「故里」と書いた句が、二句ありました。これも「故郷」と書いて「ふるさと」と読めますし、場合、場合でよく氣を遣わねばなりません。

「冗談にいつたよと小石を蹴り 北 柳

この句は句としても上の部で、「冗談」の漢字で書かれているのも悪くないと思います。「じようだん」は間のびを感じさせます。

「上品なことばはオーム直ぐ忘れ 春 也

この「オーム」は漢字の「鵝」がいか、平仮名がいいか私も考えました。「直ぐ」は漢字でなく「すぐ」とした方がよろしい。「すぐ」というような副詞は漢字にすると重すぎます。

「威嚇する言葉でけじめとっておく 雄 声

「威嚇する言葉は肚のないう男 男

この「威嚇」はよく利いています。す。「言葉」も漢字の方がよろし

い。「肚」も「腹」でなく、又平仮名の「はら」では弱すぎます。

「ことば数つきてアベック歩くだけ 洛 醉

「ことば数少ない嫁にも母はぐち 〃

後の方の「ことば数」はいいとして、初めのは特に「ことば数」の「数」が必要かどうか。

音字数に合わすためか、次のような造語が眼にとまりました。

「スカートばき 〃

「初のことば 〃

「お坐なり言葉 〃

「モダン女中 〃

いちいちの句は挙げませんが、どれもあまり品のよい用語ではなさそうです。

「そわ／＼ 〃

「する／＼ 〃

という擬声語も出ております。

「さて会えばことば出さずにそわ／＼と 〃

「ハイヤーでする／＼あつけないことば 〃

「さて会えば」の方はとにかく「そわ／＼」がのつていますが、「ハイヤー」の方はどうですか

「する／＼」は変です。

「料理人すんとんとと惜し気なし 古川柳

「寒念仏みりりみりりとあるくなり 古川柳

「男みなもしやもしやもしやと悼みけり 沐 天

面白い独創がいくらでも出来そうです。次の研究題はこうした擬声語の句にしてみたいと思います

から、どしどしお寄せ下さい。本当をいうと、ことばというと耳で聞くだけでなく、目つき、顔つき、手つき、足つきなどのことばもあつていいのです。目は口ほどにものをいいますから。

ヒゲナリ後に
アストリンゼンは世界的常識!

1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲナリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!

桃 谷 順 天 館

「身振り手振りのことば補ない 豊 年

「三角や丸を使つて意見され 雪 山

の二句が見付かりました。

絵文字、符号、身振り、手振り、口つき、目つきという題でないからいけなかったのかもしれませんが、そんなことまでの含みをもつて作句して頂きたかったので

研究題「擬声語を使って」

締切 九月十五日

発表 十一月号予定

投句先 豊中市本町三丁目二〇一

戸田古方

写真説明

右から一、記念品を受ける中島生々庵氏(前通事長)、栗(司會)、路郎師、若見理學氏



年毎に盛大を加える

川柳まつり

子澤山使いにやったのを忘れ

特別課題

子澤山

川柳川柳まつりの特別課題「子澤山」は路郎先生によって厳密な選句が行われたので茲に発表することとした。

麻生路郎選

前披

子澤山まつりだけの母となり
交連局川柳部 小島与呂志

子澤山負け惜しみも無く路地に住み
川柳大原支部 志満子

子澤山一つのは出しをびれ
川柳大原支部 節間 杏花

停年を延してはし子澤山
川柳大原支部 櫛原かよ子

性格が合わぬと子澤山
川柳大原支部 寺元貞旬朗

佳作

✓押売りへみんな出て来る子澤山
本社 黒川 紫香

✓挨拶へ子が入りかわり立ちかわり
本社 菊沢小松園

✓子澤山どれかを医者に仕立てる気
川柳大原支部 加納山来花

✓叱られる役もあるなり子澤山
川柳大原支部 深見 雅堂

✓子澤山只生きる丈生きる丈
川柳大原支部 津秋 六花

✓皆んな寝て気抜けたよな子澤山
川柳大原支部 宗高矢寸志

✓頼る子をいつか決めてる子澤山
川柳大原支部 松下京一樓

✓子澤山近所に済まぬ事ばかり
川柳大原支部 黄瀬 美秋

✓子澤山アロレス並みの喧嘩もし
川柳大原支部 田口 三平

✓十年もしたらと思う子澤山
川柳大原支部 田口 紫陽

✓生めよふやせよが今頃たる子澤山
川柳大原支部 佐野 卜占

✓車掌からせき立てられた子澤山
川柳大原支部 中土居士筆坊

✓子澤山迄も血筋にしてしまひ
川柳大原支部 松本 詩朗

✓子澤山W+Mも居る
川柳大原支部 永松東岸子

✓お父さんだけがやせてる子澤山
川柳大原支部 藤井 春日

✓バリカンを買った子澤山
川柳大原支部 山本 春也

✓後添いも多産系なり子澤山
川柳大原支部 明神 耕生

✓転んでも泣かぬ子になる子澤山
川柳大原支部 明神 耕生

参加の会

本社

川柳本社・川柳阿倍野支部・川柳梅田支部・川柳淀川支部・川柳桜島支部・川柳玉造支部・川柳大鉄局支部・川柳島之内支部・川柳池田支部・川柳堺支部・鳥ヶ辻川柳会・杏林川柳会・南海電鉄川柳会

各地

帝化川柳会・みをつくし川柳会・交通局川柳会・市電交助会川柳会・333川柳会(以上大阪府・大阪府)

川柳京都支部(京都市)・川柳貴生川支部(滋賀県)・川柳篠山支部(兵庫県)・川柳鳥取支部・川柳米子支部(米子市・以上鳥取県)・川柳出雲支部・川柳木次支部(以上島根県)・川柳備前支部・川柳弓削支部・川柳赤坂支部・川柳倉敷支部(倉敷市)・川柳大原支部(以上岡山県)・川柳下関支部(下関市)・川柳宇部支部(宇部市・以上山口県)・川柳八代支部(八代市)・川柳大聖寺支部(石川県)・川柳高知支部(高知市)・川柳函館支部(函館市)・勝英川柳社(岡山県)・明和病院川柳青蛙会(西宮市)・岡山電報局句会(岡山県)・川柳おたまじやくし会(天理市)・阪東ベルト川柳会(神戸市)・葦川柳会(松江市)・以上順不同

川柳支部 青木 鈴江
お下りを素直に着てる子沢山

川柳支部 鈴木 青柳
雨の日は託児所めいた子沢山

川柳支部 青木 遊星
こわれてる玩具ばかりの子沢山

川柳支部 菅田 真
しかるべくお前等でやれ子沢山

川柳支部 大石 幸二
子沢山父も針持つすべを知り

川柳支部 浜野 奇堂
子沢山すっかり子供にまかせきり

川柳支部 藤井 春日
戸籍課の記憶に残る子沢山

川柳支部 原 独仙
仰山な子へ押売りは荷を解かず

川柳支部 正本 水客
子沢山使いにやったのを忘れ

川柳支部 選後に
本年の特別課題「子沢山」は昨

年の「誕生」に比して句数も多か

ったし、秀吟にも富んでいた。正

本水客氏の路郎賞受賞句は淡々と

詠まれていて味のある句である。

軽みの句として成功している。

(路郎)
水客氏の受賞によって栄

本社川柳祭

戸田 古方

一、路郎先生の誕生日 ヨイ／＼

歳を召すたび若くなる
川柳祭だ よいとさのさ

手拍手そろえて踊ろうよ
サノヨイ／＼

二、月が出た／＼月が出た ヨイ／＼

不朽洞から月が出た
あんまりお月さんが

でかいので
世界の隅まで照らすだろ

サノヨイ／＼

三、一句出た／＼一句出た ヨイ／＼

ぎよつとするよな句が出来た
あんまり選者が辛いので

天かと思つたら没だつた
サノヨイ／＼

(作詞は豆秋さん、若柳吉
艶重さんの振付、柳人舞踊

家潮花さんの大車輪の指
導)

昨夏阿波踊りに行かれた時より

の懸案とか、今年の川柳まつりは

揃いの浴衣でそれがすんだらみん

なで阿呆踊に繰込もうと、路郎先

生のお書きになった句を白く、黒

く染め分けた別染め浴衣。その揃

子も柳人の大囃子。

今日の川柳まつりはいよいよ川

柳まつりらしく、紅提灯にも「川

柳」「川」「柳」「祭」。

昨日までの雨もストップ、梅雨



影撮氏 愛下 義

りどお 雑川

に日曜日。来てるは来てるは、さ

しもの光明寺の庫裡も、廊下から

本堂への渡殿までぎつしり、これ

以上に上ったたら来年の会場が心配

だ。

第一回の昨年は

土曜で夕方から、

今日はまっ昼間の

の会。緑雨、豆

秋、白柳子の柳禿

三光かくしもおえ

ぬ。

その白柳子さん

を囲んでいつもな

がら賑やかな川雑

玉造支部のひと塊

り。前理事長の生

々庵さん、お身体

の調子もよ程およ

六回の御誕生を寿ぐ川柳まつりで

あることを宣せられる。選暦の

御祝からもうそんなに経っている

とも思えぬお元気な先生、若鮎の

如くではまだ言葉が足らぬ御活

躍、嬉しいな嬉しいな、お喜びの

言葉とともに感謝の辞を繰返され

る。

その次は先生の御登壇である。

のつけから、誕生日をくずしに

やって貰えたら毎日飲めるのにな

あとは川柳の集いらしく、川柳ま

つりらしい。

何事も一芸という以上、徒や疎

そかで遠せられるものではない、

一生が勉強であるということ、哥

沢も、清元も、長唄もお相手出来

なかつた妓が口惜しがって発奮し

た話から始まって、自分の句意を

選者に解ってもらいたい為長々

と説明を書いて来る投句者に出会

う話、選者は応募句の句意不明の

時研究すること、それでも判らね

る。遠く篠山から

大拳顔を揃えて下

さつたのは何より

も大きなプレゼン

ト。

定刻一時。立ち

上つたは眼鏡にヒ

ゲのトニー・谷ならぬ西尾栗さ

ん。今日の司会である。

挨拶は北川春葉さん。理事長に

なられてからの初の川柳まつり。

川柳まつりも今年で二度目。御

手帳の付録であらかじめ丁寧に確

かめておいて、今日は先生の六十

の誕生の佳き日七月十日が今年は幸

本のは「川柳雑誌」創刊号よりの合

本の十四巻、美装函入である。疎

開によって守られた現存二タ組のうちの一組。

川柳を作る人は善人である。純情である。そして最高の人である。しかもその最先端を行く人こそ前理事長ではあるまいか。至誠の人、文字通り師のあと三尺その影を踏まない人である。師弟道の極致。謝辞を述べられるその声は早や涙でうるんでいる。

「この貴重な資料は決して私すべきものとは考えておりません。管理の必要上貸出しは致しかねますが、三休橋の診療所に大切に置いておきますから、いつでもどなたでもどしどし御利用下さいますように」

これは記録の責任と義務があると考えて敢えて採録した次第である。

あとは別掲の席題、兼題の披露、そのの始まる寸暇を利用して、去る土曜日BKより先生が連続放送してられる「松の落葉」の録音を生々庵さんの好意で聞かして頂く。

「フルにポリウムを上げましたので先生のお声が変に割れてしまひまして」と生々庵さん。

「いや僕の声より伴奏の六段の方が大分いいな」と先生。これも和やかな一ト調。

生々庵、春集、緑雨、豆秋、それぞれ持ち味を生かして精進してられるのも嬉しい。そして今日「子沢山」の特別課題を、内地は勿論遠くハワイまでも時を同じ

うして作句していると思えばこの上もなく愉快になる。そしてそれらの方々がひとしく念願してられることは幾久しい先生の御健闘である。

今日の行事の最後は葎乃先生、梨里さんまで飛び出されて、全員のコラスで踊られた川柳踊りであつた。

会場点描

正本水客

さすがは天気男路郎先生の誕生日、カン／＼照りの好日である。

開会少し前、光明寺の近くで屋がまだなんでも忙しうに箸を動かすBさんの傍にジュースを飲んでいる人をハテナと見直す矢張り先生その人、ハイキング帽を冠つた顔が馬鹿に短く見える。「十年に一べん冠るんでね」と暑い外の日光を見ながら涼しい顔をして居られる。

会場を飾る紅提灯と一緒に持つて来た句会の掛ビラがバスの中で雲隠れしてつたと云うので、S君とI君が慌てて、障子紙を切つて一枚書いては、続々と詰めかけて来る人の間をエー御免御免とかき分け一枚ずつはり出す、慌ただしく楽しい時間。

受付には川柳ゆかたが誠によく似合う恰好でIさんが坐っている。いつもの癖で奥さんと梨里さん

んの方へ行きかかる人を受付はこちらと呼止める。「どうも女性の方に魅力があつてね……」

庭の深い緑がさわ／＼と揺れて都会の真ん中を忘れさせる。今のうちに席題をと句箋を脱いでいると、Hですと挨拶された。こちらMさんの奥さんですに顔を上げてみると篠山の方々がざらりと並んでいられる。誠に嬉しい。

正面には、倉敷支部から返還された優勝楯と、生々庵理事長へ記念品として贈る「川柳雑誌創刊号から十四巻までの合本がどししりと据えられている。その間の谷間に、六十才の若鮎に似て坐られた先生の顔や肩を後ろの掛ビラがハラ／＼と撫でて、まるで流れに躍る銀鱗の鮎を見ている様で面白い。

柳話に芸者の話がいきなり飛び出してオヤツと思わしたが、素人の楽しさと玄人の悩みに話を引いて、選者の心境を語られるあたり、いつも乍ら胸のすく話術である。

自称トニー谷の名司会、栗さんのユーモアが暑さを吹飛ばしてくれる。投句数が余りに多いので選のため五分間休憩、その間に毎土曜NHKから放送されている先生の「松の落葉」がテープレコーダーでかけられる。無言で選句して居られる先生の顔と録音を七分三分に皆複雑な表情で聞き入る。前理事長への感謝状が読上げら

小児科 平尾醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎 一六四三番

れる。「明治三十年七月十日」と結ばれた先生の言葉に、心なしか涙ぐんでみえた生々庵さんの顔も皆んなの顔も一遍にドツと笑い崩れる。吉田前首相の如く、このとき先生すこしも騒がず……

兼、席題の披露が緊張と笑いのうちにスピーディに終ると、葎乃奥様を陣頭に掲げる川柳ゆかたで川柳踊りが繰込んでくる。お神酒が這入らぬと一寸恥かしいと云う顔付で、「一句出た出た一句出た」と皆小さな声で合唱を始めた。踊りは下手なほど値打がある

と云う宣伝通りかどうかは保証の限りでない。

中島生々庵氏へ記念品 寄贈者御芳名

麻生路郎(川柳雑誌一巻より十四巻まで)・鳥ヶ辻川柳会(二十口)弓削川柳会・川柳白鷺会不朽洞会員(以上十口)・藤本清年・池田支部不朽洞会員・須崎豆秋・吉田圭井堂(以上六口)・市場没食子・菊沢小松園・北川春集・黒川紫香・西尾栗・清水白柳子・富岡

淡舟・戸田古方・武部香林・八木摩太郎・松江梅里(以上五口)・福田丁路・服部十九平・浜田久米雄・平尾太希志・岩崎一伸・河村瑞川・木村千容・木口賀峰・牟田一哲・政田大介・三鴨美笑・西いわを・延永忠美・大森風来子・大坂形水・仙波谷子・田中島耕・海野比呂史・山川阿茶・安岡理枝郎(以上四口)・小西無鬼(三口)・吾郷玲人・伊達響子・藤井春日・不二田一三夫・橋本緑雨・姫田夕鐘・木下幽王・川端麗登・龜山晴峰・河村日滿・木村十倍・真鍋一瓢・三枝一策・正本水客・丸尾潮花・益永貞女・野村味平・那谷光郎・長野井蛙・西森花村・大西迷窓・岡村牛耕・杉谷湖山・榎原一善・新川博也・坂手有子・田垣方大・友淵貴山・有働芳仙・渡辺孫拙・山田季賛・山本葉光(以上二口)・戸倉普天・馬場夢生・弘津柳慶・石川侃流洞・柳葉鳩花・黄瀬美秋・木村水堂・野木香水・永田六電子・永田都詩子・大森候司案・岡田夜潮・清水翠峯・坂田良坊・下山清潮・坂田東洋男・田村藤波・寺井鋭々の諸氏・各位に御礼申し上げます。川柳不朽洞会



東天紅始末記

東野 大八

私が現地除隊したのは、昭和二十年十月上旬だったが、この除隊した確か二日目だったと思う。

北京の盛り場で、一人のニコヨン風の中国人にいきなり私はその片腕を掴まれた。当時、一落千丈敗戦国民になり下ったわれわれ日本人は、現地人からひどい迫害を受け、中には殺される人間まで出ていた。私はキモを冷やして総毛だったが、その中国人は私の耳許に口を寄せ

「我的、徐、徐白林」

と繰返した。なアーんだ彼だったのかと、ホッと思つくと、その私を彼はぐいぐい引つ立てるやうに近くの胡同へ入って行く。あたりになき所まで来ると彼は性急に

「挨拶は抜き、兎に角、私は今追われているんですよ。罪名は文化奸漢、全くひどい始末と相成ったもんです」

と言う。一名没法子先生の王克敏（元華北政務委員長）が同じ奸漢の名で天橋の露と消えたばかりの

爵青、梅娘、松齡らと旺んな文学活動を展開、昭和十八年華北教育総署に移ると、大東亜文学者大会の中国代表に選ばれ東京の大会に参加した。青い背広もリユウとして、メーションのパイプなどくゆらし颯爽たる貴公子ぶりだった。

それが日本の敗北と同時に尾羽打枯らしてこの有様である。何とかしなければ、と胡同の中で私は彼から突きつけられたその紙片を手

に暫らくは立ち尽したままだった。そう、徐白林は川柳人でもあった筈だな、と私は気がついたが、さてOは今どこにいるのか。

徐とのこうした出会いから、私はOならぬ同じ画家仲間のKから知らず島兵団というものを紹介され、その一味に加わったのである。徐と会ってから僅かそれが十日目である。

島は東北出身のでっぶり肥えた四十五、六の男だった。東北の農民運動に加わって日本を追われ、東滿に落着き、そこで東天紅という秘密結社を作った。これが馬占山の親衛隊で、満洲事変にも彼を擁して活躍した。有名な馬占山追討部隊がニセの馬將軍の首をつか

まされた事件の背後には、この東天紅の働きがあったのである。（この話の真相は面白いが後日に譲る）島はその功により、馬占山が逃げ込んで匿まれた山西軍閥

という中国名に改め大佐にまで昇進した。日本が敗戦すると同時に、山西から北京に現れ、現地で第三勢力を作り上げようとした。二百人の日本人部隊を持つところから俗に現地邦人から島兵団と呼ばれていたのである。

私は、彼の本拠にあつて「民声」というパンフレットを出す編集責任者にされた。彼はその仕事に當って私に言った。

「全民主治党を結成して私は日本の国会に打って出るつもりでいる。そのイデオロギーをこの民声に盛り込むつもりだ」

そう言つて彼は部厚い書類を私に示した。難解な起草文であつた。私がその仕事に精を出している間に、その本拠には様々な人間が集つた。華北交通の課長、大学教授、画家、大使館書記官と

いった様な連中が……。そうした某日、島は不意に私に向つて言った。

「われわれは熱河に向つて進駐する。どうだ、君も行くかい」不意のことに私が口ごもっていると、進駐に當つては二人の有能な中国人が要る。誰か心当りはないだろうか、と言う。この機会だと思つて、私は早速徐を推薦した。

熱河行の話を聞いて、私の妻とその父親は愕いた。義父は「苟しくも祖国に弓引いて一味に加わるとは以ての外」とカンカンに憤つた。かくて私は帰国と決めた次第だが、島は

「一緒に待つてくれるなら君を中佐相当官に任命しようと考えていたが、その様に家の都合とあらば仕方がない。しかし十年後、私は必ず日本に帰り国会に打って出る。そのときには何分の支援を頼むよ」

と言つて、これは餞別だよと無造作に二枚の小切手を私の前に置いた。東京虎ノ門横濱正金受取指定の額面三十万円の物であつた。私は遠慮なく頂いて帰った。妻はその二枚を苦勞して帰国用のリュックの重い紐に縫い込んだが、そうしたことがバレると、一個大隊が帰国延期になると聞かされ止むなくそれを取り出して、現地で十五万円で売却してしまつた。

だが、島兵団と行を共にしなくてよかった、と私はやがて思い知らされた。島のアジトへ第十一戦区憲兵隊が踏み込み一網打尽に検査されてしまつたからだ。徐は一体どうなったものだろうか、今以つて私の心に疼くのはこのことだった。

島の云う十年が経つた。しかしその時が来ても彼は日本のどこにも現れない。検査されたその理由は何か。これは終戦の混乱の中に体験した私の唯一の思い出である。

江戸川柳に現れた女形

役者の紋(其の四)

阿達義雄

(六) 岩井半四郎の紋

(一) 三つ扇と岩井半四郎

天明寛政期に於て、仙女路考(三代目瀬川菊之丞)と共に名女形として世評の高かった俳優に四世岩井半四郎がある。川柳に於て彼の定紋たる三つ扇に着眼して、それを棟上げの際に大工が作って祝ふ三つ扇に擬へて詠んだ句としては、

○岩井半四郎こしらへ餅を授け

(天明二年
智・8年)

の一句がある切りである。右は半四郎の紋を表に出さず、「半四郎」を扇・又は三つ扇の意味に用ひたものである。

四世半四郎は頗る愛嬌に富み、丸顔であつたので俗にお多福半四郎とも言はれ、中村座に多く出演してゐる様であるが、彼について特に注意すべきは、河原崎座に於て増山金八作の『大船盛皴顔見世』を上演するに当り、三

田の三角の局見世を踏査して、無台の上に其の風俗を写實的に演出する等、生世話物の開拓をし、市井の風俗を舞台に取り入れるに至つたことである。

五世岩井半四郎は、文化二年、四世の後を嗣ぎ、表情に富んでゐて、その上に、愛嬌と色気があつたので、極上上吉から無類の位にまで上り、「眼千両」と言はれた女形であつた。

○吉日に杜若の紋を大工建て

(五九)

○棟上げを目出度いわ井半四郎

(九六)

などは、既に掲げた句と同一着想のものである。(杜若は半四郎の俳名である。)従つて之等は單なる三つ扇句の変態の表現で、まだ五世半四郎の特徴に触れたものとは言はれないが、

○きはい娘とあふがれる三つ扇

(文化)

○勢ひは目を招くべき三つ扇

(二〇七)

○目ばかり見ても涼しい三つ扇

(二〇七)

などになると、紋章を詠み込んだ縁語仕立ての平凡な句とは言へ、よく彼の特質と人気が言ひ表したものと云へよう。

よう。

五世半四郎が文化・文政・天保期の風俗に与へた影響が如何に大であつたかといふことを色々の方面から之を証することが出来る。

式亭三馬は、その『式亭雜記』の文化八年の条、「岩井半四郎が三浦の総角の図賛」に於て、

〔三つ扇〕〔丁子車〕

半四郎は俳名杜若、家号大和屋、其先は桑三郎、俳名梅我といへりし。今嫡子に女形桑三郎あり。

伎は広し、定紋の三つ扇、いよ／＼舞台に高運を開く、名は驚る替紋の丁子車、ます／＼世上に伎名を轟せり、されば大入の見物は、岩井櫛をひくが如く、大あたりの芸評は、半四郎鹿の子のかぞふるにいとまあらず。』

と述べてをり、彼に由来する流行は、半四郎鹿子・大和屋紋・岩井櫛・岩井茶・半四郎小紋・岩井せんべい等、数へたれば甚だ多い。

半四郎は錦絵として歌川豊国によつて屢々描かれてゐるから、今その中から三つ扇紋を点入した一例を求めてみるに、大判錦絵に「役者舞台之姿絵やまとや」といふ字が図の右上に書かれた半四郎の舞台姿があり、その袖の処に三つ扇の紋の入つてゐるのが見られる。

豊国以外のものとしても、勝川春好の細判錦絵の「杜若」の衣裳の袖にも三扇の紋がつけられてゐる。

○やがて賀を祝ひかなづる三つ扇

(二〇七)

五世半四郎は弘化二年二月に隠退するにあたり、お半やお六の役を勤めて居る。右の句の収められてゐる『柳多留』一〇七編には、文政十二年丑秋の序があり、なほ此の句は「戊十二月五日開演 両題句会」の条にあるから、文政九年(彼の五十一才の時)に詠まれた句ではないかと思ふが、とにかく、やがて還暦の賀を祝はなければならぬ者が娘方をつとめ、滴る様な美貌で多くの観衆を悩殺してゐたのである。

○岩橋さんの箱せこに桑の紋

(二〇)

桑の紋とは岩井桑三郎の紋であらう。四代目・五代目半四郎の前名は桑三郎であつた。御殿女中の岩橋さんの「はこせこ」に迄桑三郎の紋(定紋なら三扇・替紋なら丁子車)がつけられてゐるといふ意味ではないかと思ふ。岩橋と久米の結びは『新古今集』の「葛城や久米路に渡す岩橋の絶えにしなかなとなりや果てなん」によつたもの。

(ロ) 丁子車と岩井半四郎

丁子車紋は幾つかの丁子を車形にした紋であつて、丁子は沈丁花とも言

ひ、馬來群島の一つであるマラッカ島の特産である。紋章の丁子は果実に象つてゐる。この植物の花蕾から採って製したものを丁香と言ひ、香料として珍重されてゐる。江戸時代には、行燈の燈心などに、この丁子形のもので出来ると瑞兆として喜ばれたことが川柳などにも見えてゐる。

その形の優雅と縁起の良いといふ処から、之が紋として選ばれたものであらう。

川柳・狂句で見ると、この丁子車の紋は女形役者岩井半四郎の紋となつてゐる。岩井半四郎の定紋が代々三つ扇であつたことは既に述べた通りであるから丁子車は其の替紋であらう。

川柳・狂句では、丁子車が岩井半四郎の紋であつた処から、丁子車は先づ岩井又は半四郎の縁語として取扱はれ、

○肩車丁子車もいゝなり (二〇二)

○下々張ははし表は丁字引キ (二〇三)

といふ様な句が詠まれてゐる。甲句は七五三の祝を岩井に掛け、乙句は、半四郎が丁子車紋で賣り出してゐることを、半紙(半四)や白地に茶色の横線を細かく引いた唐紙などの染色に言ひかけたものである。

半四郎が代々稀に見る俳優であり、特に女性間に圧倒的な人気があつた点が把握され、

○引人の多いは丁字車なり (六二)
○機敷中丁子車をみんな引キ (二五九)
○丁子車の争も女同志 (八八)

の様に、丁字車故に、あまたの引手の最良に詠みかけ、丙句などは、最良役者についての争ひを、源氏物語に於ける葵上と六条の御息所の車争ひに絡ませたりしてゐるのが見られ、半四郎の当り芸に沸き返る見物人を詠んでは、

○丁子の当り見物も上気する (九九)

とし、又、

○丁字から半四郎まで届け文 (二〇)

などは、単に丁子と半四郎との縁語仕立ての句に過ぎないが、吟者の意識の中に、吉原の妓楼丁子屋があつたに違ひない。

(七) 四つ紅葉と市川門之助

初代市川門之助は享保の頃に歿し、

二代目市川門之助が劇壇に活躍したのは、天明の頃であつた。二代目門之助は当時美貌を以て知られ、その紋所の四つ紅葉が櫛簪に附けられ、我は簪箱などに迄附けられたことは、当時の黄表紙などによつても知ることが出来る。

即ち、天明元年の黄表紙『大違宝船』には、「此金の内で四つ紅葉の簪と鶏茶縮緬の振袖をこしらひ云々」とあり、天明七年の黄表紙『色男十人三文』には「妾は四つ紅葉をはし箱へつけて、銀菊をお椀へつけて、笹りんど

うをおはちへ付けやせう。」とある。然し、「柳多留」に於て、門之助の四つ紅葉紋が現れて来るのは、文政五年以降であるから、それらは四代目の門之助を詠んだものと見るべきである。

○かんざしまで色気つく四つ紅葉 (七五)

四代目の門之助は女形であり、之は後に四代目常磐津文字太夫となつた人である。

役者から常磐津の師匠となつたといふので、世間の注目を惹いた様である。

○見かけたる山で木挽が買ふ紅葉 (八八)

縁語仕立ての句ながら、紅葉は門之助であり、「木挽が買ふ」とは木挽町の森田座へ出勤する様になつたことであらう。

○常磐津の松へ紅葉の太夫職 (二〇七) の句は、四つ紅葉の門之助が常磐津文字太夫の後を嗣いだことを言つたもので、

○成田屋と滝の屋げびた御吸物 (八二) の句は市川團十郎の紋と市川門之助の紋を狂句式に表現したものであつて、成田屋の團十郎の紋の牡丹に猪を利かせ滝野屋の門之助の紋の紅葉に鹿を利かせ、猪や鹿の御吸物を下卑た御吸物と言つたのである。

尚、浮世絵によつて市川門之助の紋を調べてみると、勝川春潮の大判錦絵

「二俳優と茶屋女」の図の中央の俳優の紋所に四つ紅葉紋が見え、鳥居清長の細判錦絵「市川門之助」には振袖に袴をつけた女太夫の恰好(但し、小さくしてゐる)の絵があるが、此の門之助の袖には①の紋があり、その袴は四つ紅葉の模様になつてゐる。之などで見ても役者の紋が漸次模様化されてゆく傾向が知られると思ふ。

右の錦絵の門之助は、その年代から考へれば、前の黄表紙と同様に二代目の門之助に違ひあるまいと思ふ。

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴) 三〇円

送料 八円

品質優良

タチカワペン

TACHIKAWA PEN

大坂市東区豊後町四八
立川商事株式會社

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙





梶尾節子さんを

訪ねて

(女流作家訪問記)

丸尾 潮花

御本名も節子さん、お歳は二十

七才、もうオールドミス組ですわ

と美しい歯並の唇を綻ばせてお話しになる節子さんは、ヘッパバーン型のお嬢さんである。お勤めは岡山県久米郡梶原町立久米小学校に奉職してられる。

「担任科目は？」

「いいえ小学校ですから何でも屋ですの」

「梶原は鉢山町だそうですが人口はどの位なのですか？」

「そうですね、約一万六千二百人位と記憶しています」

「名所と言う様なものは？」

「東洋」を誇る硫化鉄の梶原鉢山と国宝としての本山寺の山門、月の輪古墳ぐらいです」

「川維の六月号の近作柳樽で八句入選のトップに出ていましたがその御感想を一つ」

「とても嬉しいと思いました。いいえ、びっくりしたと申上げる方が適當かも知れません。トップに出るなんて考えてみたこともなかったのですの。これを機会にガンバル心算でございますのでよろしく御指導にあずかりたいと思います

すわ」

「大阪に居られる女流作家の方をどんな風に思われますか」

「そうですね、路郎先生を始め多くの先生方と御自由に御交際をなさっていられることがとても羨しゅう御座います。そして皆さんそれぞれの作風で個性のある句をのびのびと作句していられしやることとでさえ、私の様な田舎っぺには堪らない魅力を感じます」

「好きな女流作家は？」

「句風としては千代美さん、ひさみさん、白香さんです。とても個性があつて私の好きな方ですの」

「ではどんな句がお好きですか」

「淋しい句、と申しまして美麗な句と言うのではありません。又センチな句でもないのです。痛い程心の底につき通る様な鋭さを

持っている句なのですが、私なぞにはとても作れそうにも有りません」

「大阪に行きたいと思われませんか」
「それは行きたいと思つてま

す。けれど大阪の女流作家の方も岡山にもいらして欲しいと願つて

ます。
毎月訪問記を読ませて頂いてますが、皆さんに親しくお逢いしている様な気がしますの。梨花さんの訪問記、面白く読ませて頂き

ました。いつも梨花さんの句を拝見して頂いて理智的なお方だと思

つて頂いては、訪問記を見ましてより一層親しみとその感じを深く致しました。それに梨花さんの凄く川柳熱に敬服させられていま

す」
「節子さんの作品ですが、とても恋愛の句が多い様にお見受けす

るのだけ目下恋愛中ですか」の間にためらつて居られる様子であ

る。私はここで一服ブイスに火をつけることにした。節子さんは笑いながら、ぼつ／＼と口を開かれ

て理ですな」

「ええ、自分ながらじれつたいと思ひますが結局自分に自信がないからでしょうね。私には優しい句がちつとも作れないのです。だから私の句を御覧になる方はとても

気の強い女性の様に思つていらつしやるでしようけど、私自身ではそんなに鼻柱の強い女性ではないと思つてます。それで、いつでも諦めてしまふのです」

「今迄に印象に残つてゐる句は？」

「印象に残る句と申しますと沢山ありますけれど、もう三年位前になるかと存じますが産業経済新聞に親子二代として梨里さんのお写真と(ひととして風如きにおどかされ)の句が出ていました

が今でも印象深く頭から去らず覚えて居りますのと、津山の石童さんの句で(女フト身を引く愛も考える)がとても好きでした」

「恋の句、お好きですか」

「ええ、恋を主題とした句は好きです。昔から晶子の歌がとても好きでした」
「晶子がねえ。そう考えますと節子さんの(晶子が好き晶子の様な恋をする)の句がびつたり来ますね。霞乃先生をどう思われ

ますか」

「霞乃先生なんて私などから見ますと全く手の届かない雲の上の方の様に思つていました」

「とてもいい方ですよ。節子さんのお考えになつていられる様な神様の様な方ではなく、お酒も召し上りますし本当に人間としての霞乃女史でいられます」

「私なぞの句は少し余韻がないと叱られてゐるのですが……」

「例えは？」
「あのね(男四十灼熱の恋してみたく)(噂から三年きれいに他人です)(旅行でもするかと四十の恋が言う)の様に」

「でもそうした句が節子さんの句風なればそれでいいと思ひます。余韻をもつ美しい句を強いて作句しようとして、自分の個性を失つてはなりません」

「潮花さんの句で(かき船の三味すり抜ける貸ボート)を拝見しまして、去年の春休みに関東地方へ旅行しました時、大阪に寄つて観光バスで中之島公園を通つたのを懐かしく思い出しました」
「此処は夜は静かでしょうね」
「ええ、でも夜になりますとハッパをかける音が響いて来ます。もう私達の居る家の下も掘つてゐるのです。日暮から岡山三大河川の一つと言われず吉井川の流れて蟹が飛んでとても綺麗です」
(常連がもう来る頃の湯がたぎり)の久米雄さんの句が懸つてゐる。夏の陽を浴びた矢車草の花が静かに揺れてゐる。此の町にもあと二、三時間で美しい蟹の飛ぶ宵闇が流れる頃である。大阪の女流作家の方々によろしくの声を名残りに梶原を発つた。

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙・文字は正
確・開催月日及場所記入・締
切毎月二〇日・投稿先本社宛

本社川柳句会 (大阪市)

七月十日

午後一時
於 光明寺

出席者 一路郎・淡舟・与呂志・潮花・花
代子・須賀太・白柳子・紫香・いさむ・
白水・鳩花・秋花・雄声・雅堂・摩太郎
梅里・藤史郎・蜷気楼・玄武洞・天真・
満潮・市郎・玲人・黙平・夢生・多久志・
水客・圭水・兵太郎・勢三・野南・言也
道也・喜久堂・好郎・夕霧・元歩・狂二
辰始・清子・甚也・一栄・井平・操・登
志子・欽心・保夫・無鬼・ひか平・左文
字・凡志・越山・富士子・柳庄・昭月・
喜好・和友・杏花・尚徳・素男・雄峰・
きさ子・美根二・正斗・文夫・秀峯・一
文字・省三・全信・牧人・酔子・橋林・
一朗・葉乙女・貴山・芳川・吉野・葉光・
賀峰・大然・潮風・夢人・花香・たけは
る・雅集・黒天子・淀月・貞句朗・孤舟
凡々・文秋・万葉・梅志・一夜・幸・豆
秋・勝・一三天・静馬・山茶花・清潮・
堰子・紀人・京一樓・喜仙・角嵐・一平
古方・愛二・一伸・春集・へとち・東洋
男・寛峰・小松園・葉・十悟・水堂・花

村・凡九郎・生々庵・古竹・柳枝郎・博
也・恒明・阿茶・茂三・泊月・六童子・
都詩子・緑雨・南天郎・愛論・いわを・
竹荘・香林・梨里・霞乃

兼題「大阪弁」 麻生路郎選

浅草で大阪弁も負けていず 大然
大阪弁上手な方が腰長なり 一朗
弁解が大阪弁で疑ぐられ 与呂志
大阪弁商談だけはつきりし 京一郎
尾張町大阪弁が振向かれ 淀月
大阪弁或る日太々しく聞え 勢三
記者団に大阪弁で笑わせる 博也
もつりや大阪弁で口説きや 潮花
商魂の逼し軽き大阪弁 喜仙
お喋りの大阪弁につかまつた 恒明
大阪弁浪花千栄子にテストされ 秀峰
無愛想にオマスと一言だけ返事 白水
じんわりとよこした大阪弁 秋花
大スター大阪弁がちと苦手 雅堂
あんのじよう大阪弁でまるめられ 雄峰
大阪弁はいいわとマダム如才なく 好郎
大阪弁のよきと借りて来る 生々庵
演説に大阪弁でやらこうし 登志子
お互にあきまへんとなと戎橋 勢三
御隠居の大阪弁は脱みきき 与呂志
きさきまつさとも一つ買わされる 紫香
あたらに急に大阪弁になり 喜好
税務署が大阪弁で取りにくる 喜子
おまつかとバットへ千円札を出し 井平
孫までが大阪弁で帰つて来 昭月
あきまへんやテレビや洗濯機 喜好
大阪の言葉で書けば字があまり 角嵐
大阪弁こんな空地へ店を出し 酔子
間の抜けた大阪弁にしてやられ 梅里

大阪弁慌てて居ると見えぬなり
ゆつくりと大阪弁を読みなおり
てんやないかパチンコ屋でさなり
おしまいは大阪弁で切る電話
叱る時先生も大阪弁になり
あかんがなと大阪弁にしかれた
初めから惚れてまんねと大阪弁
大阪弁派手にマダムに甘えられ
上品な大阪弁で師匠老け
大阪弁背屋に住んで忘れかけ
討論も大阪弁ですむ市会
素通りを大阪弁が追つて来る
いややしと娘あつさはねつる
大阪弁丸出しでよし新世界
大阪弁でずうと通した展望車
大阪弁まる出し取ってはばからず
大阪弁がつい出してもた婦人会
老夫婦大阪弁のあくが抜け
大阪弁政府の痛いところを突き
大阪弁きつちり釣は釣でとり
おまへんと大阪弁はにべもなし
兼題「ビール」 中島生々庵選
ビール一本でアルサロねばらる 梅里
二本目のビールへ妻の願ひごと 玲人
ビールの飲める病氣とはうしろ 白柳子
珍客へビールの栓は音をたて 愛論
全快を祝ひビールを気づかわれ 満秋
一本は無駄と知りつつ栓をぬき 淀月
風鈴がビールを飲めと喝つて来る 芳川
一杯は妻も頂戴するビール 文秋
暑かたでしようとしてビール 豆秋
生ビール売る駅あつて旅楽し 宛歩
留守に來た不覚はビールにもらす 淀月
大ジョッキあおれば溜飲下ります 清子

明日は又明日さ日曜の乾きジョッキ
食卓のビールに妻の吐を読み
お隣りへビールが着いた爆の音
屋上に風ありビールも夏のもの
背負われてビールは山の茶屋につき
ポナスの不平をビール語り合ひ
ポナスをビール冷して待つてや
おビールも出たわと妻のクラス会
浴衣着替で幹事等ビールの座
屋上のビール下界に呼びかける
今日こそはビールにしき夏季手当
蚊帳はんぶん外し暑いビールにし
ビールビール俺も貴様も酔出して
湯上りの洗面器も居るビヤホール
ビールでも飲めはる腹らしい
魂のふれ合うて大ジョッキ
神様もビールの方が欲しかるに
うらぶれて冬のビールの味を言う
ビール位で酔うのか酔うている
冷やしビールこれでおしまい客に詫言
兼題「胃袋」 須崎豆秋選
チャンポンをして胃袋に叱らる 万葉
胃袋へまた国籍の違う米 満潮
胃袋も宵宮と云う忙しさ 春集
胃袋は酒持て来いにもうあきれ 貴山
胃袋を満足させてやる賞与 孤舟
鯨飲の果は胃袋切り裂かれ 夏生
胃袋が二つあるような食いつぶり 竹荘
胃袋を半分切つてから禁酒 無鬼
胃袋が食えくく回復期 雅集
只酒を呑む胃袋のただれてい 梅里
胃袋を無視し二次会三次会 詩芸塔
胃袋はお詫びかたがた胃散のみ 清子
胃袋はからっぽきらいと云う 春集

胃袋と絶い縮めもといふ

胃袋へすまぬ心で迎い酒 真佐尾
胃袋は女の意地を知りつくし 芳川
胃袋がハハアン新薬だと思ひ 白水
もういけませんと胃袋押えて見 紫香
偉大なる胃袋もって貧乏し 一三夫
胃袋の勝手が違ひおもてなし 水堂
胃袋が破裂しやせんかいな君 恒明
胃袋を切った同志だうまがい 古方
胃袋が或日スト等考える 詩芸塔
胃袋でジュースとラムネ喧嘩する 玲人
胃袋が鳴り出したのに会議中 博也
胃がゆるく痛み雨垂れ聞いている 水客
胃袋の位置思つてから気付き 杏花
胃袋も疲れボナナス日は暮れる 文夫
豚ちゃんの胃袋ときどき箸が出ず 阿茶
胃袋が満ちて目の皮たるんで来 文秋
胃袋の不遇は遂に切り取られ 竹莊
胃袋を信じ二次会派手に呑み 雅集
また鰯が来たと胃袋身構える 勢三
胃袋が二つほしい日に出逢い 角嵐
胃袋曰く勿体ないが戻します 賀峰
相談は胃袋にする一人旅 白柳子
胃袋のなけりや苦勞の無いものを 貞旬朗
胃袋へ突如青酸加里が来る 好郎
胃袋が催促をする笛が鳴り 白柳子
解剖の胃袋章魚の足が見え 都詩子
胃袋にじんわりと来る特級酒 淀月
胃袋はどんな袋と五つの子 天眞
無茶しよるなと胃袋は思へども 愛論
湯豆腐の熱さ胃袋知っている 牧光
胃袋を満足させた妻楊子 收光
酔さめの水に胃袋はとる 丸々
収賄の酒と胃袋知らず受け 花代子
胃袋の中で羊羹かしこまり

胃袋へ絶をしてまで呑みつゞけ 豆秋
兼題「蚊帳」 清水白柳子選
思い切り蚊帳の吊手に叩かれる 夏生
借りて来た漫画が蚊帳の中で採め 玲人
尼さんの頸へ蚊帳がひっかかり 一三夫
蚊帳釣つていても雷さんは落ち 和友
やぶれ蚊帳おもしろい程蚊が這入り 多志
ほろ蚊帳へ届かぬ音で踏むしん 省三
血を吸うた蚊の逃げも蚊帳の中 雄声
ぼろの蚊帳だどなり吊つて寝る 雅集
出た跡へ一寸寝て見る枕蚊帳 井平
蚊帳の端見え支開て帰りがけ 梅志
蚊帳吊つて一ト処父の帰らぬ夜 詩芸塔
添乳する扇団の風に蚊帳ゆらぎ 喜久堂
見せなさいと出した蚊帳の外 保夫
珍客へ蚊帳の吊手が外される 小松園
夕刊は蚊帳から首を出して眺み ひか平
蚊帳につきぎあてて夫婦に夢が 花代子
酔いさめの水を蚊帳をもち立て 文夫
夜遊びを叱らぬ蚊帳の父へ詫び 淀月
蚊帳をふる母も明治と云う姿 夢生
一匹で夫婦もめてる蚊帳の中 道也
たまたま蚊帳の裾からヘヤーピン 言也
八畳の蚊帳に帰省を一人寝せ 同
大胆なボーズになった蚊帳の 摩太郎
蚊帳吊つてから新妻の無口なり 杏花
蚊帳釣つた当座子猫が不眠 茂三
宿直の蚊帳日直に起こされる 淀月
蚊帳だけを丸め下宿の朝を出る 杏花
広く夜の蚊帳に母子の思ふ事 鉄心
仏壇のあたりを消して蚊帳に入り 天眞
蚊帳たたむ術を泊った母笑う 黙平
サイダーの残りを蚊帳を出て貰い 萬葉
高架から見える二階の屋の蚊帳 多志

催促が帰ると蚊帳も起きて来る 保夫
風鈴の風が蚊帳まで来てくれず 春集
かきさきの蚊帳をつまんだまや秋 大然
蚊帳吊つて人間様の巣が出来る 玲人
蚊帳吊つてやと一人になれた母 醉子
腰ひもを蚊帳の手にした妻の 麗氣楼
長女もう添乳へ蚊帳も釣れるだけ 市郎
幽きしりおんなな蚊帳で寝た不運 曜子
文化住宅も蚊帳が要るこに建て 黒天子
間借して十、六の蚊帳をもてあまし 愛論
金魚鉢の金魚のように宵の蚊帳 古竹
蚊帳の縫目去年と同じじつ見る 生々庵
オシッコに起きた見蚊帳へつき当り 麗氣楼
蚊帳に寝て夢も緑の色がつき 春集
蚊帳を吊る釘も後添い打ち変える 水客
蚊帳の隅三つはすて子に泣かれ 白柳子
兼題「人氣」 菊沢小松園選
出迎の意外な人氣に涙ぐみ 醉子
人氣出てからは女房を顧みず 摩太郎
人氣者あれで苦勞があるらしい 一伸
司会者が一層人氣盛り上げる 凡志
人氣など頓着のない芸の虫 梅里
チンピラの人氣に勝てぬ輪になり 杏花
笑わぬ喜劇役者にある人氣 市郎
老け役で落ちた人氣をとり戻し 梅志
舞台から人氣の落ちたのを感じ 春集
この人氣盛に老いたる母が 南天郎
さうも義理は欠かせぬ人氣もの ひか平
人氣とは別に手堅い店を持ち 都詩子
P・T・A金出す會長人氣あり 清子
人氣出た証握カメが後を追ひ 与呂志
一昔前の人氣でドサに来る 雅堂
人氣者紅提灯と撮される 角嵐
二枚目は二枚目なりの人氣が出 孤舟

営業笑ふボツ／＼馴れた人氣者 平太郎
一役のつきあいだけにある人氣 紫香
人氣など気にせず芸の幅に生き 都詩子
人氣者帰れば哀しい母であり 夢生
松ちゃんの人氣は母が話すだけ 泊月
人氣者うちでは歸も喰べており 静馬
人氣タリ素顔の良さも見て立ち 雅集
人氣から逃げて熱海の湯につかり 潮花
人氣出てもう税務署の目が光り 富士子
下り坂人氣へ酒が強くなり 杏花
人氣まだ落ちそうも湯に浸り いわを
芸うまくなつた頃には人氣落ち 水堂
人氣ある人へマイクは矢の如し 操
人氣より家庭のママであつて欲し 左文字
女の倅へスターとしての人氣捨て 麗氣楼
子が出来てからは人氣は芸で持ち 白柳子
人氣女優オシに馴れた頃に消え 凡々
人氣者負けても拍手鳴り止まず 淡舟
片言が一家の人氣ひっそらい 六竜子
人氣者淋しい過去に触れさせず 小松園
席題「お人好」 友淵貴山選
立替えをも一度呉れるお人好 花村
もう時間無いとは言えぬお人好 喜好
合糧のとても上手なお人好 雄声
割勘の端数捨てたお人好 左文字
退職金人がよいのであやぶまれ 阿茶
お人好も今日は怒つた下駄の音 きさ子
お人好やっぱり承知してしまい 同
お人好意見を持つたまき疲れ いさむ
お人好仏の顔に近くなり 玲人
お人好虫歯おさえてついでくる 水客
お人好歯を三本さげて来る 芳川
お人好傘を三本さげて来る 潮花
笑うた眼があんなに細いお人好

お人好飯も食わずに戻つて来
あ地位に居るのもやはお人好
お人好母子映画に出る涙
お人好又新聞の数が増え
ゼンマイをもつ巻け／＼お人好
税務署に勝つて帰つたお人好
三度目はお人好にもある怒り
お人好とみてか犬までつて来る
お人好あつさり自殺してしま
最後まで順番待ったお人好
丁度よい相手にされたお人好
乗れるだけ乗せた車掌のお人好
あれ以来判にはこりたお人好
借りた金忘れてしもてるお人好
無報酬ですと嬉しいお人好
お人好千円札をまた崩し
お人好元の座席が見付からず
お人好子供神輿についてゆき
お人好の父にまさかの二号郎
お人好無念の涙もう乾き
お人好老眼鏡がよくうつり
川柳句会(出雲市)

出雲支部 川柳句会(出雲市)
まづり
七月七日 於 教育委員会
尼 緑之助報
約束の今日(仕立て)間に合わず
今日の(仕立て)に任せて割って入り
銭湯へ今日の疲れを捨てにゆく
退院の今日へ黄菊の香り来る
今日(仕立て)誓つたはずが喫うて居り
今日からの誓を妻は笑うだけ
全盛の昔の夢に生きている母
嫁ぐ娘の背に黙つて女親
まま母と知りたる夜の星淡し

淀 月
い さ 月
昭 月
小 松 園
夢 生
隆 章
三 步
竹 莊
静 馬
賀 峰
万 葉
言 也
博 也
玲 人
角 嵐
杏 花
恒 明
生 々 庵
ひ か 平
貴 山

明日行く水磨のままで子は眠り
遅参した人が意見を持ち合は
意見する我が子に見入る母の顔
母の意見肩を落してから永し
川柳句会(下関市)
下関支部 川柳句会(下関市)
まづり
七月十日 下関鉄道職員会館
石川侃流洞報

人命を守る垣根が滝に出来
監督が留守で無駄口叩き合い
荒稼ぎやつぱり素性抜けきらず
高利貸出鼻の過ぎた茶をすすめ
中の物贖んだチャックが立たせ
団体へやかんの儘で廻るお茶
一生を決める見合の茶を運び
かつぎ屋が廻り道した駐在所
駐在所に来れば巡査も裸なり
貫軸を見せて監督演技つけ
借りに来た(仕立て)承知のお茶を入れ
荒稼ぎもとを質せば西部劇
駐在所犬も喰わぬをもち込まれ
ワンピース背中のチャック母に
早飛脚お家大事を知つた足
残業へ一息入れるお茶をくみ
監督の細かさ芸を引立たせ
お茶くみも出来て一人前とされ
駐在所電話のベルまでけたまし
監督へごまする道をもう覚え
貸した旅費大抵帰らぬ駐在所
荒稼ぎ内地をケチなものに見る
水垢離の説経に消える滝の音

雲 平
代 仕 男
美 好
最 人
千 里
柳 慶
良 坊
同
土 筆 坊
同
木 陽 子
戊 理 智
ほ な み
茂 美
侃 流 洞
吞 氣 坊
同
九 呂 平
同
伊 三 男
同
司 様
久 仁 男
光 堂
一 規
十 字 星
藤 四 郎
柳 蛙

上客を呼び捨てて売る浜市場
今朝からは呼び捨てになり割烹
社長呼び捨て赤旗の眼がすわり
呼び捨ての頃を談じる応接間
呼び捨てを真似て可愛いわ父さん
呼び捨てにさせぬ後添い美しく
呼び捨てに出来ぬ出世の友を訪
先ずお流れを社長から頂て廻る也
金借りに廻れば世間鬼ばかり
煙ばかり追うて疲れる火の見番
肩に手が廻る予感の肩でいる

七月旬会
牛の目のつながれしまま憤る
看護婦に逆ういて気分よき日
犬は犬だけの理窟で吠えている
憤りうっかり熱いお茶をのみ
憤り五円はりこみ投書する
おでんやの花輪にとまる黒湯羽
来る日待つはれの囃子の下稽古
紙芝居来る日約してたそがれる
看護婦へ叱つて貰う父の無理
看護婦をカメラに立たせ退院す
憤り押えて笑う余裕見せ

川柳句会(倉敷市)
倉敷支部 川柳句会(倉敷市)
まづり
七月十日 於第四福田小学校
田垣方大報

出張へ気前を見せた大ジョッキ
アベックの足跡砂浜でもつれり
先輩の足跡大きく社に響き
舗装路へ来て足跡を見失ひ
わが過去の足跡として日記見る
足跡を忍べときつい母の鞭
先代の足跡踏んで蓄めて居る
足跡が灯に消えていて慌て
先哲の足跡踏んで置き去られ
影のある憩の場所他人が占め
だからだと云われともない日蔭者
隠れんぼ影が出てくるは知らず
理論整然藤に女のある教師
ピルの影追いつ靴履位置を変え
面影を忘れる酒が高うつき
軽そうな顔がのれんを分けて入
ベダル迄こたえぬ軽い母になり
恋人の願ひ気軽に聞いてやり
子宝のない身軽さを羨やまれ
負け惜しみ涙がにじむ座をは
負け惜しみ涙がにじむ座をは
負け惜しみ涙がにじむ座をは
負け惜しみ涙がにじむ座をは

斜 木
笑 雷
志 日
五 茶
宗 步
流 風
素 身 郎
千 容
凡 一 路
龜 庵
聰 牌
吞 張
五 茶
泥 魚
し の 女
春 也
閑 人
清 子
越 鳥
清 子
天 風
明 心
桂 月
一 念
方 大
素 身 郎
一 善
承 平
千 古
志 日
可 笑
実 穂
愁 水

炎天を来て息つがぬ大ジョッキ
レッチャが落ちてビール冷え
ビールなら少し相手になれる妻
生ビール特急にまだ五分あり
つけはくろくビール位じゃ物足らず
不振とは見えぬ社長はのビール腹

七月九日 川柳まつり前夜祭

於 方 大 居

このビール師に呑ませる前夜祭 萬古
 前夜祭明日の授けはどうかする氣 春 日
 今夜こそ飲む氣祝う前夜祭 斜 木
 去年より願ふれのふえた前夜祭 千代春
 先生のお傍でのもて淋しかり 一 善
 師の誕生秋にも欲しいなと思ひ 谷 水
 何処よりも派手に祝うた前夜祭 春日
 乾杯へ紅一点の恥ずかしさ 伊津美
 愉快なり師の嬉しさが聞こえろ 方 大
 弟子どもが先生よりも先に呑み 萬 古
 一杯目師の短冊の前へ置き 方 大
 川 篠山支部 川柳まつり句会 (兵庫縣)

七月三日 於 関電寮

小西無鬼報

学生の休暇バイトの稼ぎどき 三ツ枝
 独身の休暇はあつさり日延べされ 秋 峰
 親泣かせ暑中休暇の永い事 小 菊
 折角の休暇というにあてもなく 洋 牛
 休暇中里でへちまと目を過し 枝 葉
 ボーナスを握つて夢のある休暇 ひか平
 特権の生理休暇へ遠慮せず 無 鬼
 年頃の娘もあるに人の世話 光 子
 世話好きを病氣だなど殺生な 雀 子
 おだてられ世話好又も断れず 鈴 江
 愚痴を言いながら一人で世話な 富士子
 世話好が町内の役ひつきらい 左文字
 待つていた様に世話好役を受け 凡 志
 質問になつて一瞬声ひそめ 拳 坊
 質問もせず不足な顔で去に 越 山
 知らぬとは云えぬ教師として答え 白猫児
 質疑欄私にようく似たのが出 日 竿

六月 例会

金欠は損を承知で月賦にし 一 途
 損しても処分をしたい売れ残り 民 子
 パチンコ屋も客も損して貸家札 枝 葉
 商売は損をしてても愛想よく 小 菊
 損をして得取るうは未だ知らず ひか平
 ライバルへ挑戦的に紅を塗り 光 子
 恋人の出来たしるしか化粧する ことゑ
 初めての化粧まっすぐ歩かれず 三 枝
 出勤の化粧で五分程遅れ 敦 子
 田舎者と見たか平氣なコンパクト 左文字
 井戸端は同じ顔振れ日半暮れ 与 一
 新入社飲む顔振れへいつか入り 白猫児
 顔振れへ遠慮のいらぬ足を出し 鈴 江
 出欠の返事顔振れ聞いてから 富士子
 顔振れはうなずくで通じ合ひ 初 穂
 顔振れを揃えた寄附に断れず だ だ
 便箋で書かち口下手とも見え 凡 志
 便箋の用はいつでも妻まかせ 雀 子
 便箋を脱んだだけの筆不精 日 竿
 便箋に仮受取をして戻り 無 鬼
 川 大聖寺支部 川柳まつり句会 (石川縣)

七月七日 於 明石居

野村味平報

御幸福にと失恋の置手紙 一 恒
 幸福を願う妻にもある悩み 醉 羊
 味噌汁に幸福がありみんな無事 魯 木
 幸福なにおい少なき鮎を焼く 久 雄
 米寿へテープレコーダーの声もよし 味 平
 正客に翁を招きお茶の会 桃 園
 水喧嘩一歩手前で雨になり と よ
 商店街美人投票に人気呼び 明 石
 別れ来て帯のきしみにある疲れ 寿 子

川 赤坂支部 川柳まつり句会 (岡山縣)

七月九日 於 大介居

政田大介報

お隣のミキサー借りる桃のでき 水 吞
 新世帯ミキサー使った料理も出 零 泉
 ミキサーの宣伝医者も口を添え 三 四 詩
 ミキサーがあるのにお茶であしらわれ 宇 柳
 ミキサーを村一番に買う我慢 友 月
 雷と異名を取つたうるさ型 沐 雨
 雷が鳴らない前の口達者 花 蜂
 雷鳴も氣になるままに西瓜の輪 静 人
 雷へ二の足を踏む迎え傘 直 人
 肉休は落目女優の厚化粧 静 人
 上達の秘訣を開けば只努力 米 豊 年
 行商の秘訣は押の一手とか 沐 雨
 釣れてない人から秘訣聞いて居り 冬 扇
 川 大原支部 川柳まつり句会 (岡山縣)

七月十日 於 山口十坊居

本田恵二朗報

天井へ向いてニヤオンと云うておき 恵二朗
 灯を消してから天井へ葎が並び 坊 太 郎
 天井に煙草を吹いた勝将棋 ゆかた
 手相にはなかつた五人目が生まれ 真
 云訳をしながら駒を放り出し 平 八 郎
 アダリンで娘言訳したつもり 孝 平
 言訳を鼻で聞き／＼飯をつぎ 松 太 平
 ボクやないアタリおいと砂糖つば 米 花
 天候のせいにしておくカメラ狂 十 坊
 親分肌出したが金でゆきづまり 秋 芳
 やわ肌へ輪をつけてゆく聴診器 野 川
 今夜こそ打明ける氣の廻り道 一 山
 今夜こそと思う今夜も云いおれ 十 坊
 約束の今夜は来たが出来ぬ金 いく女

今夜から父になるぞと産湯たく 凡 平

借別のしきりに眼鏡曇るなり ゆたか
 借別の母娘波止場に影長し 青 美
 借別の引導こともなげに告げ 真
 広告へ線路に向いた葉を貸し 秋 芳
 広告の本社は路地の二階借り 未 花
 早合点一つ手前の駅に降り 平 八 郎
 早合点されて断りにくうなり 十 坊
 早がてん云い訳をして勘づかれ ゆたか
 早がてんして恥しい札を云い 葉 柳 子
 出した手のやり場に困る早合点 春 浪
 早がてん盤持りの娘抱き止めた 恵二朗
 早がてんそれから長い片思い 耕 花
 川 木次支部 川柳まつり句会 (鳥根縣)

七月九日 於 城南菊居

藤井明朗報

純情で通り過ぎて売れのこり 詩 朗
 純情と見たか妓が寄つて来た 鶏 声
 信じてるだけで純情泣いている 綾 美
 純情は只サヨナラを言つただけ 明 朗
 結婚十年もう蚊帳が狭くなり か 上 子
 朝の蚊帳寝息へ一ヶ所吊り残す 耕 文 字
 自炊する蚊帳忙しく丸められ 明 朗
 一日の疲勞が蚊帳にもつれて寝 加 本
 皆無事で昨年の釘に蚊帳を吊る 蜂 人
 広い蚊帳に独身寝つたけれど 十 宝
 胃袋へ入れて良く効く頭痛薬 詩 朗
 妻が来て話題が変る涼み台 正 夫
 涼み台将棋の仇待っている 詠 式
 川 米子支部 川柳まつり句会 (米子市)

七月十日 於 川柳会館

井上戯耕報

4うとてつた人持酒市
借リに弟ん太ふて高 76リート

影踏んで踏まれて太る踊りの輪 水鏡
水影へやっぱり女の身だしなみ 新雪
足音に二人の影がそつと割れ 紅帆
新婚の宿も仲人きめてくる 雄々
宿帳に妻とかかれる嬉しい日 節枝
親衆を泣かせ汗拭く舞台裏 量子
訪問着女おろかな汗をかき 金星
母の汗ネオンの下で飲んでいる 無閑
涙ほろほろ 歡迎の辞を受ける 美笑
歡迎の旗ヒラヒラと待たされる 戯耕
歡迎会更に決意を誓つてい 蛙眼子
歡迎へ殿下微笑で応えられ 十樹路
歡迎の列長々と雨に立ち 禿童
歡迎の席で氣まづい眼に出合 一机
歡迎のアーチ商魂たくましく 丹
歡迎の花火にファン血を湧かす 秋馬
歡迎の抱持ちの方ほつとかれ 風車
歡迎の辞が長すぎて酒が煮え 八糸
歡迎に來れぬ税吏で腹が立ち 散歩
汗かきで人の知らない気がする 康江
氷屋の配達人も汗をかき すすむ
この汗は爽りにつづく銀をうち 陳死路
汗だくになって大穴ゴールイン 天邪鬼
よくやつた汗と涙に優勝旗 月斗
汗まみれ子は無意識に良く遊び 向子
ニコヨンも汗惜しむのを買われ 素飄
宿命を信じて楽な日を送り 庄次郎
観光へ宿のサービス迄も入れ 吾柳
手拭がとまどうている児の寝汗 青香
ワニのいる国が移民を歡迎し 千柳
一日の汗を忘れたらしい風呂 久義
歡迎をされぬお人が長居をし 庄太
汗ばんだ駒を王手につき出され いづみ
歡迎を日本一の顔でうけ 定男

川 八代支部 まつり 句会 (八代市)

七月十日 於熊本日新聞城南總局 佐野ト占報

帰省した室なつかしい古畳 卜占
安らかな眠り畳は古くとも 信夫
畳屋の前で恥入る古畳 一陽
古畳坐り度くないいい簀物 柳泉
破れ畳タンスの下に身を隠し 銀風
国策に添うてそのまゝの古畳 暢子
槓突いた意地へ左遷が待ち受ける 土竜
意地と意地中の娘は無表情 道雄
意地悪もしてみたい恋の飽和点 芳仙
お隣の娘に母が負けさせず 節雄
動くとも知らず地球の上に住み 魚屋
マイシンに頼る心が浮動する 晚泉
前線は動き測候所忙しい 一字九
揺籃は泣き止む迄を太く揺れ 蘇柳
ハイヒール家鴨みない腰が揺れ 小足
頭振り尾振り金魚の恋たのし 突信
胎動へ不倫の悔を噛みしめる 文子
アドバンス風が変った向を変え 泉涼
訪れる春もギブスが動かさず 竹四郎
遊技場だけが榮えて国産し 高夜
田舎にも電化ブームの灯が 千代咲
自衛隊アメリカさんの色に染み 秀敏
老人に条件附の嫁が来る 節夫
女秘書手ごわい紐をつけて居り 高夜
川 函館支部 まつり 句会 (函館市)
七月十日 於 町会事務所 龜井花童子報

日曜のプラン化粧に待たされる 喜美江
夕刊の隅まで読んで支度待ち 三郎

不精髭ネクタイしめてから氣付き 松影
襪踏んで立つ姿見へ梅が入り 星行
猫の子を捨てる話へ子は必死 蜷氣樓
真剣な恋が悲しい遺書となり 力也
派出婦は家にかなう世辞で生き 一笑
臨時でも良いとは無職不憫なり 青柳
山門が託児所となる農繁期 真佐夫
金持は金持なりの不満もち 花童子
ままごとに一人勝氣の娘が帰り 竜笑
子が出来ぬ生活の不満義やまれ 竜笑
川 雑布 ウイロー社句会 (ハワイ)
哇支部

山快夢起報

自信を持てと子の自慢はめてやり 保枝
三人を嫁かせて男手の自慢 馬喜々
自慢する癖が出世の邪魔になり 迷朗
のど自慢鐘の二つに恨みあり 東田樓
感謝詞入れて自慢の軸をほめ 柳葉
大漁が餘に残る釣自慢 虹橋
手紙には豚尻と書いて子の自慢 旋風
黙々とお伴自慢を聞いて吞み 草一郎
借りるまで自慢話へ逆らわず 同
下手な喉ぼて陳良のお氣に入り 快夢起
のど自慢夢を未来にして歌い 關魔王
金持を自慢が寄附へ出し送り 常夏
健康なだけが自慢の貧乏人 泉水
月賦ではないかと自慢の鼻をおり 拝山
歌と節お国自慢の盆踊 周防
叔母さんの一つ自慢は姪の事 曉舟
新妻を自慢するにも酔うたふり 浪之助
奥さんの自慢癖でに乗って来る 陽炎

川 高知支部 句会 (高知市)

六月五日 於 迷窓居

口笛を吹けば浴衣の君が来る 英太郎
許され試歩へ今日から浴衣がけ 昭
子の浴衣ふと亡き夫を思い出し 眞一郎
二号郎神な浴衣を届けさせ 梅林
浴衣がけ辻の連珠に負けて来る 俊一郎
僕の着る浴衣の柄も妻好み 温夫
アベックの浴衣が白い夜の道 真砂人
浴衣着の方が借金訛びている 玲羊
家中の浴衣が寄つて来る花火 徳三文
まだ処女の頃の浴衣を懐しみ 迷窓
川 淀川支部 句会 (大阪市)
七月二十一日 於 香林居 武部香林報

出生地満洲ですとらふれる 山茶花
背囊のすり傷見せる涼台 堯中
ウインドを離れぬ妻の背中つき 文平
金屏風背にデカンショしか知らず 香林
ボーナスが出てニヒリスト 改心し 巨人
泣き落し未だニヒリスト 嘆らす氣 花村
嫌われる訳は知つてニヒリスト 保夫
ニヒリスト死骸は海へはれと言ひ 多久志
寄附帳が素通りにするニヒリスト 東洋男
ニヒリスト祖国の山にあきたらず 若菜
ニヒリスト世間の義理が無駄に見え 水堂
蛙何思つたか下水に居 水茶
うまそうな蛙鳴いてる田圃道 潮風
川 池田支部 句会 (大阪府)
六月廿一日 於阪急本社地下社員食堂 菊田いさむ報

けちくさいさうパチンコ玉はく 凡九郎
釣れてこぬ夜舟は陸の灯を眺め 一夜

夜舟も月を背負うたまま流れ 杏花
ザアアすが嫌になるほどよくしやべり ただし
古裡らしくしやべりも板につき いさむ
おしやべりが今日は黙っている 蘭痛 一夜

貴生川支部句会 (滋賀県)

五月四日 於 夢生居 黄瀬美秋報

役得の折が当った下痢となり 美秋
役得へ飲んで貰って礼を言い 観月
税務吏のこどもも手拍子足拍子 美秋
役得のない小役人のアミダくじ 夢生
入歯してサシミの味がチト変り 木人
日向ぼこ孫に入歯を貸してやり 美秋
総入歯はすせば十もふけて見え 夢生
入歯とは知らず敬老会で賞め 春巢

玉造支部句会 (大阪市)

七月句会より 清水白柳子報

ペン／＼に乾いて竿のかたがつき 清子
魚籠の中成程と云う竿を持ち 登志子
干物を跳足で入れる俄雨 朝路
子沢山雨も休めぬ軒の竿 井平
旗竿を斜めに仕舞う十二坪 賀峰
胡麻塩と間違える程蟻遣入り 朝路
スト権のない蟻の生活がふんわり 六竜子
咬んだ蟻逃げた代りが殺された 登志子
蟻達よ一服したらどうですか 清子

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

中毒にもうなつてます盃を受け 草右
薬にも中毒があり世は寂し 桃村
アル中と言われて酒に不自由せず 春雄

人妻となつてもリボンよく似合い 愛論
人妻の苦勞も知らずナース老け みのる
資本家に無視されている汗を拭く 没食子
待合せ雨の場合も定めておき 斜水
待合せ不粋な友に見つけれ 竹莊
待合わす時計のネジは又巻かれ 幸男
気になつた化粧のままで待合所 方正
同窓会人妻とみえぬ騒ぎ様 ハナ子

南海電鉄川柳会 (大阪市)

四、五、六月句会から 於 親和寮 友淵貴山報

各停は慌てない顔ばかりなり 雄声
各停を選んで乗せた親思い 昭月
食卓のお茶も主人待ちわびて 一好
同窓会立たされたのもこの廊下 柳床
アパートの廊下に世帯は出て居 圭水
吊革の女同志がよくしやべり 圭水
吊革に二十二貫の身を任せ 玲人
餌だけが売れて小鳥屋今日も閑 貴山
補回戦ナイターの灯さえ渡る 雄峰
終電が気になるナイター補回戦 隆章
ナイターの灯が消えてから月が出る 正吾
ナイターが終り電車が又ラッシュ 昭月
ナイターの客に押される螢籠 梅志
ナイターの後千日の灯に染り 摩天郎
無免許に「進め」と出てる交又点 玲人
一回の事故で名高い交又点 圭水
信号の長さ気にして交又点 のぼる
オイコロと云いたくも交又点 隆章
交又点巡査職業意識が出 路郎

帝化川柳会 (大阪市)

六月 佐野白水報

看護婦という十代に叱られる 華泉
病院の匂い離れぬまま帰り 辰始
病院のマイク急患来た報せ 一の字
病院で今年も過ごす夏の夜 一星
今さつき息引取った部屋が空き 雅堂
病院へ社内ニュースを待つ見舞 葉乙女
病院のベットの隣の雑誌 春潮
大吉のおみくじ持っている家出 一平
感違いした電報を読んだ 白水
ハンサムが後に居てた感違い 与呂志
感違いの百万円は組違い 乱酔
感違いしたまま女房寝てしま 京一樓
学芸会無理した衣裳が端役なり 甲子朗
肩書が増えて借金共に増え 惠撰子
無理言いに来ましたが借りられる 好祐
無理言いで建てた我が家が未完成 豚平

七月句会

みをつくし開いてた焼火を落し 雅堂
たこ焼で三本立を見て帰り 寛峯
ナイロンを敷く愛人の座るとこ 春潮
ビニールの頬冠りがとふ俄雨 一平
ビニールの前垂女房手が拭けず 三平
中元のすそ分けらしいものが来 好祐
中元で馬を射る気の女物 白水
螢光灯息をしてからバツつき 京一樓

みをつくし川柳会 (大阪市)

六月十四日 於 凡九郎居 戸田古方報

甘く見る相手に軽くあしらわれ 圭水
待つていた便りハガキで短かき 葉光
ハイキング千報に止した空は晴れ 花香
独り言猫が一匹ききとがめ 正斗
独り言真屋の金魚ひとと居る 梨花

天来の声になつて独り言 古方
聞いてくれと云わねば独り言 凡九郎

七月句報

鯛追うて二足三足立つたまま 正斗
竹光の結構光る舞台劇のぼる 圭水
病床は雲の動きをじっと見る 凡九郎
あいつらはそこあたりで性がある せつ子
冥想の場所に選んで墓に立つ 花香
巣立つ子はいつかそれ就職し 十倍
帰るには惜しい宵だと橋に立つ 葉光
腹立つ事を日記に書いて寝る 梨花
手に拘う砂感傷と共に落ち

3.3.3川柳会 (堺市)

七月六日 於 島野工業検査室 川村好郎報

素人の鳥飼一羽また死なし 雄声
口下手の誠社長は買つてやり 狂二
口下手はうなずくだけで逆らふ 雪山
口下手にしては前金取つて来た 貴山
口下手でんねと仲居ようしやべる 夕霧
ニールック国産売場は素通りし 一楽
日本文字一字も書いてない和製 冗歩
ドラ鳴るマイデンジャバン山と積み 好郎
和製だがあらと似てる名前つけ 圭水
妻の名案と／＼／＼／＼／＼／＼／＼ 比呂坊
お隣の電話も書いている名刺 摩天郎
名刺出す途端へそくり顔を出し 素男
交換の名刺はちよつと戴かれ 梅里
表では足らず裏まで刷る名刺 同里
名刺には書けぬ仕事として儲け 梨里
夏更せが冬まで続く借金苦 満春
川 おたまじやくし会 (天理市)

五月十日 於 よろず相談所病院

菱田満秋報

阪東ベルト川柳会 (神戸市)

飯尾寄与史報

五段目の良き弁当を食いそびれ 季生
女事務屋を抜いてる美容術 満秋
折弁へ一本欲しい箸を割り 牧人
弁当の温み背負うたビクニック 香車
散髪道具長屋中廻り 梅林
散髪鏡の中を偵鬼行く 蛾燈
合植を巧みに打って床屋刈り 千年
切りますと一両床屋はさみ入れ 花鶴美
信じてた缺少々刈り込まれ 潮花

作業服たまの新品ひやかされ 美喜坊
外出着今は地図入り作業服 三平
作業服着てもオシャレ忘れぬ娘 比加留
作業服脱いで紳士の往復り 捨太
小ざれいに疊んだ妻の作業服 寄与史

口止めの酒とは知らず吞まされる 春坊
口止めをさせる飴玉二つやり 雁来紅
口止めがばれそうになり暖一つ みのる
口止めをされて女中は忠義めき 美笑
口止めに貰った指輪はげてゆき 茶甫
単調に出来て機嫌が顔に出る 白郷子
機嫌とることが上手で呼びにゆき 香髪子
看護婦の機嫌配茶の湯がこぼれ 昇二
慾望も失せて枯木のように生き 鶏太郎
ステッキの先が慾望知っている 幸二
慾望を捨てて平和な平社員 登志朗
慾望を子はクレヨンで塗りたくり 鳥持

六月十九日

七月十六日

原章坊報

慾望を捨てて平和な平社員 登志朗
慾望を子はクレヨンで塗りたくり 鳥持

青年川柳クラブ (兵庫県)

五月廿一日 於 城東村

出口白猫児報

忘れたことがいまだにうきうき ひろむ
出港のドラで眼さます港町 秋峰
うわごとの夢中へ布団着せ直し 白猫児

約束の日につきつちりと税吏来る 香車
お人だけが約束守って花鶴美
約束の場所人の影やりすごし 冬雨
よいバベになると約束しても飲み 遣通
婚約のまだ猫をかぶつとり 満秋
酔ぐせを知って早くめしにする 千年
山登り雲だけが知る仲の良き 季生

灰皿の汚れへ客の目を感じ けん坊
倦怠期また灰皿を買って行き 紅帆
灰皿を見つめ御意見きいている 天痴人
灰皿を見つめ御意見きいている 緑之助
空席が一つアベック止めにする 卓坊
空席のない三等へ追いやられ 外樹
空席をじっと待つ間に汽車が 新生

忘れたことがいまだにうきうき ひろむ
出港のドラで眼さます港町 秋峰
うわごとの夢中へ布団着せ直し 白猫児

川柳と愛情

政田 大介

川柳は人間及社会の赤裸々な姿を描くの余り、稍もすればそれは余りにも諷刺的な野次馬根性的なものに逸脱している場合がありはしないだろうかと考えさせられる。

たとえば紫雲丸事件の当日、各紙夕刊は事件の悲惨な記事に埋めつくされているのに、その一隅の川柳によって、読者に川柳とは余りにも悲情な野次馬根性的なものだ

と印象つけた事実である。

それは「事故死」と題する(人)口の過剰を事故で調整し」という句である。大阪市の一読者は「あんなに悲痛な記事に覆われている同じ紙面に、こんな句があつていいものだろうか。ただ一片の川柳と笑い捨てるには、この句はあまりに非情な野次馬根性ではないだろうか。この事件で、かけがえない愛児を失った母親はこの川柳をどう読むであろうか。編集者の見解がききたい」と抗議している。

『あの句と事件とは偶然のめぐりあわせであつた』と編集者は弁

明しているが、それにしても此の句は余りにも愛情が無き過ぎると思ふ。

東京学芸大学の比企修教授は最近某雑誌で次の様に述べている。

「柳多留初篇にある役人の子はにぎく(を能寛)という句がよく引合ひに出されるのであるが、あいつの句は、川柳評万句合の句七万の中にほんの一つか二つしか見出されないということはよく考えなくてはならない。外にないからいつもあの句が引合ひに出されるのである

しかもこの句は川柳評万句合、宝曆九年のところにあり、前句は「うんのよい事く」であり、むしろその生れた子の果報を愛でている意味に於て、川柳が選んでいる事を知るべきであり、川柳は常に愛の心を以て選に臨んでおり、決して区々たる諷刺罵詈の如き句は採っていない。

川柳の選に當つては、常にこの二つを外さず、温かい愛の心を以てしていたからこそ、古川柳は永久に消える事なく伝えられる芸術品となり得たのである。

季節一品料理
江戸前にぎりすし
アベノ橋地下映画食通街

梅里の店

大萬

★大万川柳(第五十五回)を募る
兼題「アベック」路郎先生選
締切・九月十五日 句数五句以内
発表・九月二十一日 (会内掲示)
授句は 阿倍野区松崎町三丁目
一〇 大万川柳会宛

人の難儀見て見ぬふりの処世術 いさを
美しい夢靴下が破れとり ひか平
元氣よく出た面影がまだ残り 芳花
霊柩車徐行もせずに出てしまふ 無鬼
好きでない人と話して好きになる 牙子
皮肉屋の姑をしのぶ初の盆 勉仲
日の丸をつけて羽田を發つ選手 一柳

不朽洞

会から

▼路郎師は、大阪市長招待の在阪文化人との文化施設懇談会に、七月廿二日正午、花外楼へ参会。平素抱懐の文化施設に対する所見を述べ文化の在り方につき理事者の施策上種々の項目に亘り申言された

▼中島生々庵博士は、父君の追善供養として七月十八日午後七時から三休庵の生々庵居で、路郎師、一哲、瑞川、瑠枝郎、比呂史、太希志、一伸、阿茶の諸氏等を紹介し追善酒供養を修営、夜半に及ばれたと▼編集長麻生梨里嬢は七月卅一日の堺に於ける夜市川柳大会に出席、天位として堺市長賞獲得。女流作家として、万丈の氣を吐かれた▼阪田良坊博士(下関病院長)は七月廿二日骨折にて二週間同院病室に入院、病室が院長室、病院管理局に早変る状況、病床より「病得て知る院内の底力」の句偈を寄せられた▼龜山晴峯氏(大阪市)は、七月十六日商用で福岡市に出張。若松、小倉の河童祭を見物十九日帰阪▼黒川紫香氏(池田市)は、七月十六日乗鞍山頂上から平温泉、上高地、焼岳を経て帰宅「落つけば平湯静かな湯の香り」の句偈を寄せられた▼福田了路氏(高槻市)は、八月三日諏訪湖から松本郊外浅間温泉での校務研究大会に出席。上高地、下呂を経て六日帰宅▼若林草右氏(大阪市)は「新開西」の依頼を

受け七月十六日夕刊紙にらくがき粹談を執筆、紙上を飾られた▼高崎雄吉氏(堺市)は、南海電鉄労組役員代表として一行十名と上京、用務を了し日光、鬼怒川温泉に過遊、「尊徳の像が浴槽眺めてい」の句偈を寄せられた▼小西無鬼氏(兵庫県)からの便りに依ると四月の篠山支部主催観桜句会路郎師夫妻の臨席答礼の意味で、令國も交えて多数会員同伴、本社川柳まつりの盛況に一驚、越山、風志両氏と今後、村の青年層への作句活動に奮起することのこと

▲大森嶽句楽氏(岡山県)は路郎師の「松の落葉」のラジオ放送を聞き、恩師なればこそ「寸言身を刺す」と消息▼本田恵二朗氏(岡山県)から、夜の九時ともなると足の裏あたり冷めたいと思ふ涼氣、山家暮しの唯一の取柄とのたより▼酒井ひか平氏(兵庫県)から川柳まつりの本社句会の雰囲気を感じ、来年から当地では川柳まつりを一週間早く繰上げ、本社へ出掛けようとの声が多数あったと便り。なお、左文字、白猫児、枝葉氏等は、職場グループで活躍、又婦人層の作句熱益々旺盛の由

川柳雑誌社
淀川支部

大阪市東淀川区三津屋北四ノ二九

残暑御見舞

若本多久志 岡部 癸中
坂田東洋男 小林 文平
志水 礼司 岡島 柳詩
木村 水堂 土田 麦亭
西森 花村 三原 潮風
加納 山茶花 西本 保夫
水野 水茶 武部 若菜
早川 野甫 武部 香林

西日本川柳大会(第七回)

日時 九月廿五日(日)午前十時
場所 馬淵小学校新講堂(岡山県馬淵町)
兼題 「サビス」路郎師選スクリム美笑選漫画「久米雄選
「プレゼント」香林選脅迫「日満選」スリル「梅里選」好き」
馬淵平選美人「十九平選」スター「晴の助選」(各題三句)
馬生路郎師
麻生路郎師
○柳話 岡山県馬淵町馬淵小学校新講堂・岡山県馬淵町・山陽新聞社・夕刊岡山新聞社
久米南町長・馬淵町工務局長・久米南町教育委員会・馬淵商業協同組合長・久米南
馬淵町青年会代表
○総合賞 岡山県馬淵町馬淵小学校新講堂・岡山県馬淵町・山陽新聞社・夕刊岡山新聞社
久米南町長・馬淵町工務局長・久米南町教育委員会・馬淵商業協同組合長・久米南
馬淵町青年会代表
○会費 三十円(出席者)・投句料 三十円(兼題投句料)・切手代八
円四枚封入のこと○兼題投句締切九月十八日○投句先岡山県久
米郡久米南町・福島鉄児宛○投句注意投句は各題一句毎にタテ
六寸ヨコ一寸の白句箋に書き裏面に雅号を記入のこと、出席予
定者も投句料三十円添え期日迄に必ず提出のこと

残暑御見舞

川雑池田支部

戸田 古方 黒川 紫香
村上のする 小池 しげお
竹内 圭三 菊田 いさむ
永藤 彌平 田中 春造

新会員紹介

秋津 六花(宇部市)正
八月 半休氏推薦

主催 川柳雑誌社馬淵支部
後援 久米南町・外各種団体



公・私・雑・記

★層では立秋も過ぎたがまだ／＼あつい。朝夕が心持ち涼しくなっただけである★私は単行本を書くために家をあけていたので暑中見舞や残暑見舞の答礼もしないが、ゆるし願いたい★阿波踊りは自分が云い出したので、思い切って出かけ、先頭に立ってさん／＼踊りまくって来た。詳細は十月号で発表する★本号は予告通り山雨楼追悼号とした。多くの人達が故人を偲ぶ記事や追悼吟を寄せて下さったことを感謝している★川柳雑川まつりの記事や特別兼題「子沢山」の選を本号へ発表した。本年の特別課題は佳吟が多かった。来年期して一段と技を磨いてほしい。

柳界展望

(路)

▼恒例による本社川柳忌は、九月三日(第一土曜)午後六時半から下寺町二丁目バス停前の光明寺で開催。なお川柳忌とともに本社副主幹故福田山雨楼追悼句会を修営することになった。奮って来参されたい。▼南区医師会杏林川柳会は、八月廿八日午後七時半から水間観音の一竜で開催▼南海電鉄川

柳会は、八月廿九日午後六時半から粉浜の南海親和寮で開催。▼大阪通信病院の鳥ヶ辻川柳会は八月二十日午後一時から五階講堂で開催。以上何れも路郎主幹出席。▼川維玉造支部(大阪市)は、八月八日午後六時半から第一句会を白柳子居で開催。▼川維池田支部(池田市)は、二十三日午後五時半阪急地下食堂で八月句会開催。▼川維堺支部八月句会は、十九日午後六時半摩太郎居で開催。▼333川柳会(堺市)は、八月九日午後五時半から島野工業K検査室で開催。▼川維京都支部(京都市)は、七月九日夕に川柳まつりを、七月十六日に七月句会を開催。▼川維米子支部(島根県)句会、七月十日川柳まつりを川柳会館で開催。▼川維弓削支部(岡山県)は、七月九日川柳まつりを堀谷医院で開催。九十名を超える盛会。なお、八月六日第二十回町長杯争奪句会を本郷商店で開催。小川貞子氏町長杯獲得。▼川維下関支部(下関市)は、七月十日職員会館で、川柳まつり開催。▼三井造船句会(玉野市)は、七月二十三日夜三友クラブで開催。▼川維赤坂支部(岡山県)は、九日夜川柳まつり句会開催。優勝盃は、小原宇柳氏獲得。▼坂下也奈貴追悼句会(東京都)が八月二十日午後一時から神田豊島町の東浜会館で開催。▼今治川柳協会主催東予川柳交歓大会を七月十七日今治市黒

住教会堂で開催。▼川維備前部(岡山県)は、九日久米雄居で川柳まつり句会を開催。▼川維高知支部句会は、七月十日川柳まつり句会開催。▼川維倉敷支部(岡山県)は、七月十日第四福田小学校で川柳まつり開催、余興に角力吟等があった。▼川維大原支部(岡山県)は、七月十日川柳まつり句会を山口十坊居で開催。▼岡山電報局川柳会は九日赤支部で川柳まつり協賛の句会開催。▼毎日新聞は、七月三十一日朝刊紙上、日曜ルポに「地方文化の健康児、町の予算に川柳費計上」として「川柳の町(岡山県弓削)」を大きく所載、全国津々浦々に多大なる反響を与えた。▼夜の大坂観光バスに便乗して、中之島、大坂城、放送局見学、キャバレー・メトロや歌舞伎座見物其他、歓楽街風景を句作する毎日新聞社企画主催の依頼により八月三日夜、路郎師を始め梨里、豆秋、白柳子、小松園の諸氏が参加し川柳眼に映じた大阪を句作された。▼川維函館支部では亀井花童子氏宅で七月十日川柳まつり句会開催。▼久保和友氏(滋賀県)は、八月七日高野山へ登山「高野山避暑なら避暑と言ひ給え」の句信を寄せられた▼渡辺伊津志氏(網走市)は、七月二十日から二十八日迄北千島放浪へ出張された。▼竹原雲平氏(島根県)は、今秋出雲支部で当地方柳壇の故人を偲ぶ句会開

催につき目下準備に忙殺されていると。▼沼田三六氏(岡山県)は目下高血圧で加療の由。「看病へカルテと別に有る命」の病床吟を寄せられた。快愉を祈る。▼坂手有子氏(岡山県)から、女性として「福寿草」句集刊行を喜び毎日一句づゝ味っていられる由。▼速水真珠洞氏(福岡県)は七月二十日九重と阿蘇の高原の杖立温泉に清遊「滝に付つうしろの巖は河鹿なく」の句信を寄せられた。続いて黒川、宝泉寺各温泉を周遊、二十六日帰福された。▼米沢昭明氏(大洲市)が吉野山の学校放送研修会に出席したと吉野山から通信があった。▼蛭子省二氏(愛媛県)は、福田山雨楼氏の逝去に驚かれ、病臥中悲嘆一層切実の由。▼三条東洋樹氏(神戸市)は、青森の海峡親善川柳大会へ出席されたと十和田湖から通信があった。▼川柳大辞典(上下巻B6各千頁余)予約特価二千二百円送料地方七〇円都内三〇円東京都千代田区神田小川町二の六日本文化振興株式会社出版部日文社 (摩)

正誤

▼七月号六頁中段五行目「池にもせず」は「死にもせず」の誤▼八月号三〇頁二段一六行目「野色」は「難色」に訂正▼八月号二七頁下段「催促の……」は暗合句につき取消▼八月号三〇頁一段二二行目「花青」は「花香」に訂正。

Printed in Japan

募集

課題吟募集

特価(廿句まで)富岡 淡舟選
ノート(廿句まで)河村 日満選
財布(廿句まで)大西 八歩選
見學(廿句まで)武部 香林選
(九月二十日締切)

毎号募集

近作柳樽(雑詠廿句)麻生路郎選
川柳塔(雑 詠)麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)
(毎月二十日締切)

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▲「課題吟」は誰でも投句が出来る。
▲「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌

第十卷 第九号

(載轉禁)

半ケ年 二六四円
一ケ年 五二八円
昭和三十年九月廿五日印刷
昭和三十年九月一日発行

川柳雑誌社

発行所 川柳雑誌社
電話 住吉 六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

THE SENRYU ZASSHI

NO. 340

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

**高血圧を
忘れよう!**



サーピナ錠

1日1~2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠! 成分含量も多くてお得です

 山之内

O.S.K

株式會社 **のレディメイド**

大坂商店

大阪市東区糸屋町一丁目
電話東④一七四五番

海つり

加太・小島・谷川
淡輪・箱作・尾崎
和歌浦・淡路由良

魚つり電車特発
なんば毎朝5時

南海電車